

---

草 加 市

---

# 毛 長 沼 外 瓦 A 遺 跡

---

株式会社東栄住宅分譲住宅事業予定地に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告

2018

石田 健一 株式会社 東栄住宅

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 序

国指定名勝「おくのほそ道の風景地 草加松原」や名産の草加せんべいなどで知られる草加市は、かつての宿場町の面影を市内の随所に残しています。また、東京都に隣接しており、市政60周年を迎える平成30年には人口約24万8千人に達しました。

草加市域には、多くの遺跡が存在することが明らかとなっており、毛長沼外瓦A遺跡もその一つです。今回の発掘調査は、分譲住宅事業に伴う事前調査です。発掘調査は、関係者および関係機関が協議を重ねた結果、土地所有者の御理解と御協力の下、石田健一氏・株式会社東栄住宅の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、古墳時代前期から平安時代の溝跡が発見され、多くの土師器や須恵器が出土しました。

人々の暮らしの痕跡は遺跡と呼ばれ、そこから見つかる遺構や出土した遺物の数々は、先人の営みを現代に伝えるかけがえのない国民共有の財産です。これを記録した本書を、埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に御活用していただければ幸いです。

最後になりますが、本書の刊行にあたり、発掘調査の実施に御尽力、御協力を賜りました石田様と地元関係者の皆様、株式会社東栄住宅様に心から感謝申し上げます。

平成30年9月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 藤 田 栄 二

## 例 言

1. 本書は、草加市新里町に所在する毛長沼外瓦A遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

毛長沼外瓦A遺跡 (No. 04 - 009)

埼玉県草加市新里町 149 番地 1 号他

平成 30 年 4 月 24 日付け教文資第 2 - 2 号

3. 発掘調査は、株式会社東栄住宅分譲住宅事業に伴う事前調査である。調査は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）・草加市教育委員会生涯学習課が調整し、石田健一氏・株式会社東栄住宅の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 委託事業名は、下記のとおりである。

株式会社東栄住宅分譲住宅事業予定地に係る埋蔵文化財発掘調査委託

5. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3 の組織により実施した。

発掘調査は平成 30 年 4 月 1 日から 5 月 31 日まで実施し、魚水環が担当した。草加市教育

委員会飯島義広が協力した。

整理・報告書作成事業は平成 30 年 6 月 1 日から 7 月 31 日まで実施し、魚水が担当した。平成 30 年 9 月 21 日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 447 集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、株式会社ビゾン測量設計に委託した。

7. 発掘調査時における写真撮影及び出土遺物の写真撮影は、魚水が行った。

8. 出土品の整理・図版作成は、魚水が行った。

9. 本書の執筆は、I-1 を草加市教育委員会生涯学習課、他を魚水が行った。

10. 本書の編集は、魚水が行った。

11. 本書にかかる諸資料は、平成 30 年 10 月以降、草加市教育委員会が管理・保管する。

12. 発掘調査から本書の作成に至るまで、土地の所有者の石田健一様、地元関係者の方々、株式会社東栄住宅様には格別のご理解・ご協力を賜りました。殊に記して感謝いたします。

# 凡 例

1. 本書におけるX・Yの座標は、世界測地系国土地標準平面直角座標第IX系(原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″)に基づく座標値を示す。各挿図に記した方位は、全て座標北を示している。

C-3グリッド北西杭の座標及び標高は、X=-21200.000m、Y=-4620.000m(北緯35° 48′ 32″、東経139° 46′ 56″)、標高1.668mである。

2. 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設置し、10×10mを基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、いずれも北西杭を基準として、南北にアルファベット(A・B・C…)、東西に算用数字(1・2・3…)を付し、アルファベット-算用数字と呼称した。
4. 本書における本文・挿図・表・写真図版に示す遺構の略号は以下のとおりである。

SD…溝跡

5. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。例外は、図中に縮尺とスケールを示した。

遺構図

調査区全体図 1:200

遺構平面図・断面図 1:120 1:60 1:40

遺物実測図

土師器・須恵器実測図・拓影図 1:4

陶器類実測図 1:4

石製品実測図 1:2

金属製品実測図 1:2

6. 遺物実測図の表記方法は、以下のとおりである。

須恵器は断面を黒塗りにした。

彩色された土器については、その範囲に網をかけて示した。(赤彩10%、施軸20%、黒色処理30%)

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高(単位m)を示す。

8. 測量図内の各種網掛け部分表示は以下のとおりである。

…地山

9. 遺物観察表の表記方法は次のとおりである。

・器種は、土師器・須恵器・灰軸陶器・石製品と表記した。

・口径・器高・底径はcm、重さはgを基本単位とする。

・( ) 内の数値は復元推定値を示す。

・[ ] 内の数値は残存高を示す。

・胎土に含まれる鉱物等のうち、肉眼で観察できる特徴的なものを記号で示した。

A-雲母 B-片岩 C-角閃石 D-長石 E-石英 F-軽石 G-砂粒子 H-赤色粒子 I-白色粒子 J-白色針状物質 K-黒色粒子 L-その他

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。

・残存率は、図示した器形に対しての遺存割合を%で示した。

・備考には出土位置・注記No・生産地・年代等を記した。

・色調は、『新版標準土色帖』に従った。

10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:50,000(大宮)(野田)(東京北東部)(東京北西部)地形図を編集の上使用した。

# 目 次

序

例言

凡例

目次

|                  |   |               |    |
|------------------|---|---------------|----|
| I 発掘調査の概要        | 1 | III 遺跡の概要     | 7  |
| 1. 発掘調査に至る経過     | 1 | IV 遺構と遺物      | 10 |
| 2. 発掘調査・報告書作成の経過 | 2 | 1. 古墳時代の遺構と遺物 | 10 |
| (1) 発掘調査         | 2 | (1) 溝跡        | 10 |
| (2) 整理・報告書の作成    | 2 | 2. 平安時代の遺構と遺物 | 17 |
| 3. 発掘調査・報告書作成の組織 | 2 | (1) 溝跡        | 17 |
| II 遺跡の立地と環境      | 3 | (2) グリッド出土遺物  | 26 |
| 1. 地理的環境         | 3 | V 調査のまとめ      | 28 |
| 2. 歴史的環境         | 4 | 写真図版          |    |

## 挿図目次

|                   |    |                   |    |
|-------------------|----|-------------------|----|
| 第1図 埼玉県の地形図       | 3  | 第10図 第3号溝跡出土遺物(1) | 14 |
| 第2図 遺跡周辺の地形       | 5  | 第11図 第3号溝跡出土遺物(2) | 15 |
| 第3図 毛長川左岸の層土区分と年代 | 5  | 第12図 第2号溝跡        | 19 |
| 第4図 周辺の遺跡         | 6  | 第13図 第2号溝跡出土遺物(1) | 20 |
| 第5図 遺跡位置図         | 8  | 第14図 第2号溝跡出土遺物(2) | 21 |
| 第6図 全体図と基本層序      | 9  | 第15図 第2号溝跡出土遺物(3) | 22 |
| 第7図 第1号溝跡出土遺物     | 10 | 第16図 グリッド出土遺物     | 27 |
| 第8図 第1号溝跡・出土状況    | 11 | 第17図 古墳時代中期初頭の遺物  | 28 |
| 第9図 第3号溝跡・出土状況    | 13 | 第18図 墨書土器         | 29 |

# 表 目 次

|     |              |    |     |              |    |
|-----|--------------|----|-----|--------------|----|
| 第1表 | 周辺の遺跡一覧表     | 6  | 第4表 | 第2号溝跡出土遺物観察表 | 23 |
| 第2表 | 第1号溝跡出土遺物観察表 | 10 | 第5表 | 溝跡一覧表        | 27 |
| 第3表 | 第3号溝跡出土遺物観察表 | 16 | 第6表 | グリッド出土遺物観察表  | 27 |

# 写真図版目次

|     |                     |                  |
|-----|---------------------|------------------|
| 図版1 | 1 調査区全景(1) (西から)    | 5 第3号溝跡遺物出土状況(3) |
|     | 2 調査区全景(2) (西から)    | (東から)            |
| 図版2 | 1 第1号溝跡遺物出土状況(1)    | 6 第3号溝跡遺物出土状況(4) |
|     | (西から)               | (北から)            |
|     | 2 第1号溝跡遺物出土状況(2)    | 7 第2(東)・第3号溝跡    |
|     | 3 第1号溝跡遺物出土状況(3)    | 8 第3号溝跡          |
|     | (東から)               | 図版4              |
|     | 4 第1号溝跡(東から)        | 1 第1号溝跡          |
|     | 5 第2号溝跡(東) (東から)    | 2~16 第3号溝跡       |
|     | 6 第2(東)・3号溝跡断面(東から) | 17・18 第2号溝跡      |
|     | 7 第2号溝跡(西)断面(西から)   | 図版5              |
|     | 8 第2号溝跡(西)遺物出土状況(1) | 1~21 第2号溝跡       |
| 図版3 | 1 第2号溝跡(西)遺物出土状況(2) | 図版6              |
|     | 2 第2号溝跡(西)          | 1~19 第2号溝跡       |
|     | 3 第3号溝跡遺物出土状況(1)    | 図版7              |
|     | (西から)               | 1~18 第2号溝跡       |
|     | 4 第3号溝跡遺物出土状況(2)    | 図版8              |
|     | (北から)               | 1~4 グリッド         |
|     |                     | 5 第2号溝跡          |
|     |                     | 6・7 第3号溝跡        |
|     |                     | 8~10 第2号溝跡       |

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

平成29年9月8日に株式会社東栄住宅より埋蔵文化財包蔵地に関する照会があり、草加市教育委員会が確認をしたところ、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地「毛長沼外瓦A遺跡（04-009）」に該当した。土地の開発に当たっては、法に基づく届出が必要である旨を説明した。

これを受けて、同年9月15日付けで株式会社東栄住宅から埼玉県教育委員会教育長宛てに埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

当時の草加市教育委員会では埋蔵文化財担当職員が不在であったため、埼玉県教育委員会生涯学習文化財課（当時）に支援を依頼した。

同課の協力を得て、同年11月1日に試掘調査を実施した。調査の結果、2条の溝を検出した。遺物は土師器、須恵器が出土した。

協議を行った結果、開発計画の変更は不可能であり、十分な保護層の確保が困難であったため、記録保存を目的とした発掘調査の措置として取り扱うこととなった。同年12月13日付け草教生第420号で埋蔵文化財発掘届出を埼玉県教育委員会

教育長宛てに進達した。

これに対し、埼玉県教育委員会から平成30年1月12日付け教生文第4-1428号において工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があった。

なお、それに先だち、石田健一氏、株式会社東栄住宅、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会、草加市教育委員会の五者で、同年1月11日に「株式会社東栄住宅分譲住宅建設事業予定地に係る埋蔵文化財の取り扱いに関する協定書」を締結した。

発掘調査は、同年4月1日から5月31日までの期間で、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となり調査を実施した。また、石田健一氏、株式会社東栄住宅、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者による発掘調査実施に係る委託契約を締結した。

文化財保護法第92条の規定に基づき、同年4月3日付けで、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から埼玉県教育委員会教育長に発掘調査の届出が提出された。

（草加市教育委員会生涯学習課）

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

毛長沼外瓦A遺跡の発掘調査は、株式会社東栄住宅分譲住宅建設事業に先立ち、平成30年4月1日から5月31日まで実施した。調査面積は224.08㎡である。

発掘調査は、4月9日に事務所設置及び重機による表土除去を開始した。

遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業は、表土除去の終了に合わせて4月16日に実施した。

その後、人力による遺構確認と精査を行った。調査区内からは古墳時代や平安時代の溝跡が検出された。遺構は基準点測量の成果に基づき、順次土層断面図・平面図を作成、これに併行して写真撮影を行った。5月15日に高所作業車を使用して、全景写真の撮影を行った。

遺構の調査後は埋め戻し、5月下旬に事務所撤去、事務手続きを行い、発掘調査を終了した。

### (2) 整理・報告書の作成

整理報告書の作成事業は、平成30年6月1日から平成30年7月31日まで実施した。

遺物は、水洗・注記の後、直ちに接合・復元を行った。復元を終えた遺物は、順次実測・トレース・採拓を経て、遺構ごとにパソコンで印刷用の図版組を行った。6月下旬に、図版用の遺物写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

遺構は、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図を照合・修正した第二原図を作成し、スキャナでパソコンに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いてトレースし、土層説明などのデータを組み込み、印刷用の版下を作成した。

7月中旬までに原稿執筆を終えて、報告書の割付・編集を行った。7月31日に、選定した印刷業者に入稿した。報告書は、8月・9月に3回の校正を経て印刷を行い、平成30年9月21日に報告書第447集『毛長沼外瓦A遺跡』を刊行した。

図面や写真などの記録類や遺物は、7月に順次、整理・分類した。これらの諸資料は草加市教育委員会が管理・保管する。

## 3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成30年度（発掘調査・報告書作成）

理 事 長 藤 田 栄 二  
常務理事兼総務部長 川 目 晴 久

### 総務部

総 務 部 副 部 長 田 中 広 明  
総 務 課 長 新 井 了 悟

### 調査部

調 査 部 長 瀧 瀬 芳 之  
調査部副部長(調査) 吉 田 稔  
調査部副部長(整理) 山 本 靖  
主幹兼調査第二課長 上 野 真由美  
主幹兼整理第一課長 福 田 聖  
主 事 魚 水 環



## 2. 歴史的環境

毛長沼外瓦A遺跡（1）の調査では、古墳時代と平安時代の遺構・遺物が発見されている。遺跡の周辺では、従来からこの時期の遺跡の存在が知られていたが、より巨視的にはさらに古くからの遺跡が連続と知られている（第2～4図）。

### 縄文時代

早期では住居跡は知られていないが、大宮台地鳩ヶ谷支台の縁辺部で、川口市安行中学校遺跡（24）、川口市安行領家中道東遺跡（23）などに炉穴の検出がみられる。前期では、川口市赤井台遺跡（28）で関山式期の住居跡が知られている。中川低地でも草加市金明町で発見された丸木舟の年代が約5300年前と計測されており、前期後半に比定される。また、東京都足立区花畑遺跡（13）で諸磯b式期、足立区大鷲神社境内遺跡（30）付近で繊維土器が出土しているが、いずれも遺構に伴わない。この時期は縄文海進の最盛期にあたり、陸地が少なかったと推定される。中～後期になると、毛長川の両岸は陸地化が本格化する。草加市東地総田遺跡（7）や草加市毛長沼外瓦B遺跡（8）、足立区伊興・谷下・扶間遺跡（以降「伊興遺跡」）（2）などで土器片が採集され、川口市江戸袋遺跡（20）は貝塚として知られている。住居跡は大宮台地上の例に限られ、安行中学校遺跡、安行領家中道東遺跡、川口市新郷貝塚（25）、川口市前野宿貝塚（26）などが知られている。晩期の遺跡としては、川口市猿貝遺跡（22）や新郷貝塚などで貝塚が検出されているが、晩期終末期には遺跡数は激減する。

### 弥生時代

弥生時代前期の遺跡は関東平野全体でみても希少であるが、川口市猿貝北遺跡（21）では土器片が出土している（草加市史編纂委員会1997）。中期は周辺には遺跡が見られない。後期になると猿貝北遺跡で住居跡が検出されている。中川低地では、住居跡は存在しないが、足立区舎人遺跡（18）で

後期後半の土器が出土しており、この頃から低地上の微高地へ進出が開始されたと思われる。

### 古墳時代

低地一帯に形成された微高地上への進出が本格化する時期である（第2図）。方形周溝墓が検出された舎人遺跡や草加市蜻蛉遺跡（4）を皮切りに、毛長川北岸では東地総田遺跡や草加市西地総田遺跡（6）、草加市仲町沼田遺跡（5）、草加市瀬崎堤外遺跡（34）、毛長川南岸では伊興遺跡や花畑遺跡、足立区氷川神社境内遺跡（19）、足立区延命寺境内遺跡（15）、大鷲神社境内遺跡などが分布する。これに呼応するかのように、諸集落を見渡せる大宮台地南端に造営された川口市高稲荷古墳（29）は、現存しないが、墳丘長約75mで県内でも古く最大級の前方後円墳であった。これらの遺跡数の急激な増加については、東海地方の土器がしばしば伴うことから東海地方からの移住説（高橋1985a）と、集落と古墳の動態から水田耕作地を求めての台地上からの進出説（柿沼1988など）が知られている。

中期は伊興遺跡、次いで足立区花畑遺跡（13）で多量の初期須恵器、韓式系土器や石製模造品が出土し、両遺跡で祭祀遺跡としての性格が強くなる。毛長沼外瓦A遺跡や川口市石御堂遺跡（33）はこの時期に営まれる。

後期には舎人遺跡や伊興遺跡、花畑遺跡、足立区法華寺境内遺跡（14）など、毛長川南岸に遺跡の分布の中心が移っていく。足立区白旗古墳群（12）、足立区経塚古墳（16）、足立区白山塚古墳・一本松古墳（31）、草加市御殿稲荷古墳（10・11）などの古墳が形成されていくのもこの時期と考えられている。

### 奈良・平安時代

遺跡周辺は、『倭名類聚抄』にいう足立郡堀津郷に比定される（『鳩ヶ谷市史』）が、定かではない。台地上には川口市赤井台遺跡（28）や川口

市東本郷台遺跡(27)で集落跡が知られる。特に、赤井台遺跡では布目瓦の出土から周辺に寺院の存在が想定され、製鉄炉が検出された猿貝北遺跡と併せて、地域の中心域と考えられる。一方、低地への進出は奈良時代には停滞し、伊興遺跡をはじめ、布目瓦が出土した足立区若宮八幡神社遺跡(34)や鍛冶工房跡のある舎人遺跡など、毛長川南岸の既存の諸集落が継続するのみである。平安時代以降には毛長川北岸に再び遺跡数が増加し、東地総田遺跡、西地総田遺跡、蜻蛉遺跡、毛長沼外瓦A遺跡、草加市掘返し遺跡(3)、草加市本田南通遺跡(9)、草加市門木遺跡(35)、石御堂遺跡などが自然堤防上に展開している。

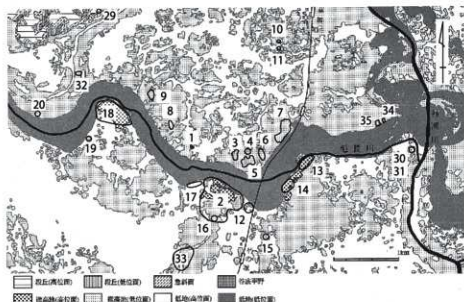
## 中世

「関東御教書」には地頭として谷古宇左衛門次郎と伊古宇又次郎の名が現れるが、彼らはそれぞれ毛長川北岸域(谷古宇郷)と毛長川南岸域(伊

古宇郷)に拠点を持った地頭武士と比定されている。遺構や遺物数は減少するものの、若宮八幡神社遺跡を中心に、舎人遺跡や東地総田遺跡、蜻蛉遺跡、石御堂遺跡などの集落跡が存在する。毛長川北岸では、14世紀～16世紀中葉の板碑が20基確認されているが、これは草加市域の板碑数の約4割にあたる。伊興遺跡で確認された鉄製経筒も併せて、この時代の旺盛な低地開発をうかがわせる。

## 近世

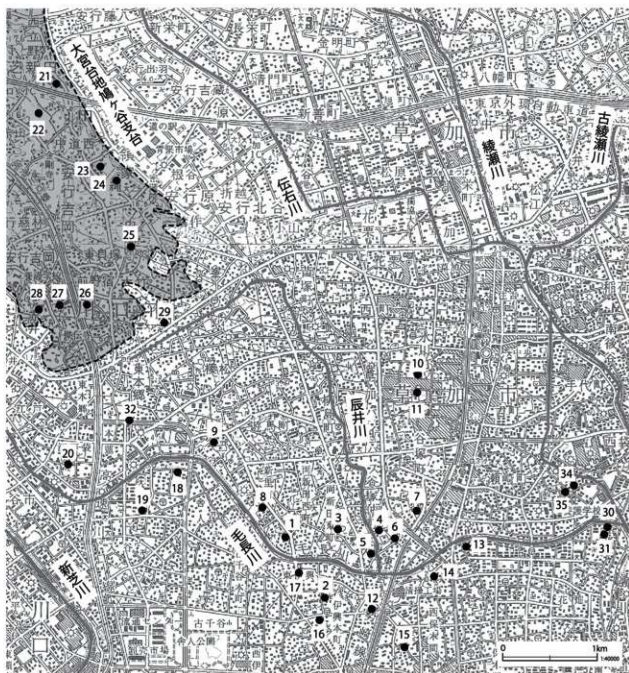
中世末以来の郷村が存在する一方、周辺は新田開発の舞台ともなった。徳川政権代官頭の伊奈忠次は千拓と新田開発を推進し、各村落の範囲・石高を確定させた。寛永七(1630)年に、奥州道中の千住宿・越ヶ谷宿間の中間宿として草加宿が成立する。現在の草加市の由来の一つであるが、遺跡の調査は毛長川兩岸の諸遺跡が中心で、宿場跡の実態はいまだ明らかではない。



第2図 遺跡周辺の地形(村石1999を改変 遺跡番号は第4図と対応)



第3図 毛長川北岸の層土区分と年代(遠藤ほか1987より一部改変)



第4図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表 (第2・4図)

| No. | 遺跡名      | No. | 遺跡名     | No. | 遺跡名    | No. | 遺跡名     | No. | 遺跡名       |
|-----|----------|-----|---------|-----|--------|-----|---------|-----|-----------|
| 1   | 毛長沼外瓦A   | 8   | 毛長沼外瓦B  | 15  | 延命寺境内  | 22  | 猿貝貝塚    | 29  | 高稲荷古墳     |
| 2   | 伊興・谷下・狭間 | 9   | 本田南通    | 16  | 経塚古墳   | 23  | 安行領家中道東 | 30  | 大鷲神社境内    |
| 3   | 掘返し      | 10  | 御殿稲荷古墳A | 17  | 東伊興    | 24  | 安行中学校   | 31  | 白山塚・一本松古墳 |
| 4   | 鯖峠       | 11  | 御殿稲荷古墳B | 18  | 倉人     | 25  | 新郷貝塚    | 32  | 石御堂       |
| 5   | 仲町沼田     | 12  | 白旗古墳群   | 19  | 氷川神社境内 | 26  | 前野宿貝塚   | 33  | 若宮八幡神社    |
| 6   | 西地総田     | 13  | 花畑      | 20  | 江戸袋貝塚  | 27  | 東本郷台    | 34  | 瀬崎堤外      |
| 7   | 東地総田     | 14  | 法華寺境内   | 21  | 猿貝北    | 28  | 赤井台     | 35  | 桐木        |

### III 遺跡の概要

毛長沼外瓦A遺跡は、中川低地南部の草加市新里町に所在する（第5図）。遺跡は毛長川左岸に形成された自然堤防上に立地している。一帯は埼玉県内でも標高の低い地域であり、現地表面の標高は約2.2mで、遺構確認面の標高は1.5m～1.3mである。遺構確認面は、全体的に調査区北東側から、南西の毛長川方向へ緩やかに傾斜する。調査区内では、全体的に標高1.4m前後から湧水が見られ、東側と南側で湧水しやすい傾向が見られた。

現地表面から遺構確認面までの深さは、70～80cmである（第6図）。地表面から深さ約30～50cmまでは現代の碎石（Ⅰ層）・盛土（Ⅱ層）で、深さ約40～50cm程度から暗褐色系のシルト質土の堆積（Ⅲ～Ⅳ層）が見られる。Ⅳ層からは近代前期の磁器片が出土している。下面が畝状に波打つことから、畑地の耕作土と思われる。V層および遺構確認面は、調査区内の全域でⅣ層およびV'層によって攪乱を受け、本来の遺構が掘削された面ではない。このため、中世以降の状況は不明である。しかし、V'層は、第2号溝跡が完全に埋没した後に堆積している。グライ化作用をあまり受けていない灰黄色を呈し、中世に遡る可能性がある。V層以下は自然堆積層である。V層は灰白色シルト質土としたが、黄色を帯びており、毛長川南岸では自然堤防の基盤層を形成する指標的な地盤とされる「黄褐色粘土質シルト」（村石2004）に近い土層である。地下水位に近い箇所ではグライ化による還元作用を受けて青灰色を呈し、上層になるほど酸化作用によって黄褐色を呈する。Ⅵ層と第3号溝跡の下B層は同一の層である。毛長川南岸における「青灰色中粒砂」、あるいは遊馬町での地質調査（遠藤ほか1988）における「河成の砂層」と同一と思われる、Ⅱ～Ⅰ章で述べたように、毛長川が古利根川や古荒川の旧河

道であった時代を表すものであろう。V層と同様に、地下水位の高低によって青灰色～灰白色の色の変化が見られた。

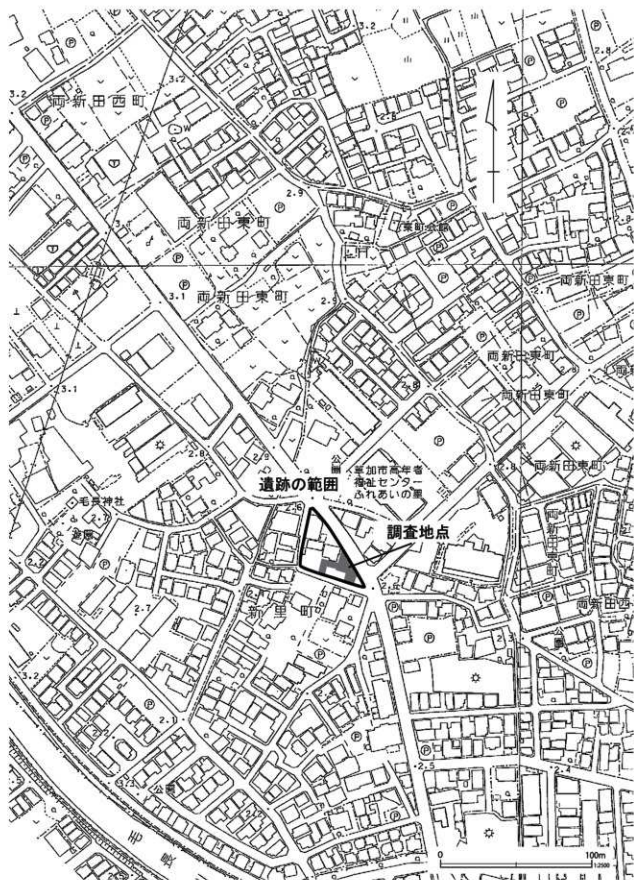
今回の発掘調査では、古墳時代と平安時代の遺構と遺物が発見された。調査区は遺跡の南東部にあたり、調査面積は224.08㎡である。

検出された遺構は、古墳時代の溝跡2条、平安時代の溝跡1条である。溝跡は3条ともほぼ平行し、明確な方向性が捉えられた。なお、調査区内東端のC4グリッド周辺では攪乱が著しく、第2・3号溝跡の続きは確認できなかった。

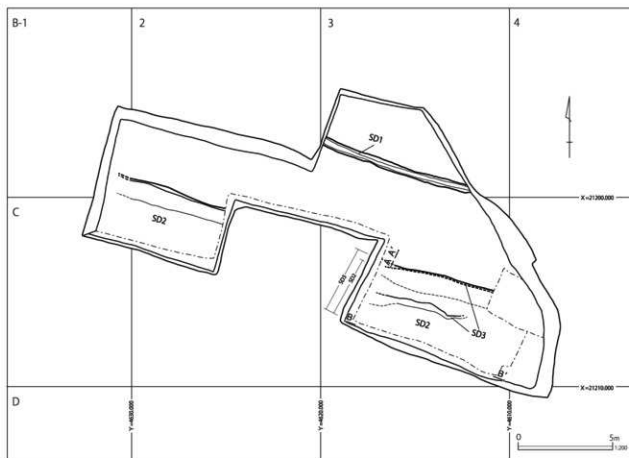
遺物としては、須恵器、土師器のほか、灰釉陶器や鉄滓（碗形滓）、石製品が出土した。古墳時代の遺物は中期初頭が中心で、壺や甕、高坏などである。平安時代の遺物は9世紀後半が中心で、土師器の坏や碗、須恵器の甕や長頸壺などである。平安時代の遺物の中には、埼玉県で生産されたものに限らず、東海地方や千葉県で生産されたと思われる製品も含まれていた。

またこれらとは別に、表土掘削時、B3～C3グリッドにかけて畝跡が視認できた。Ⅳ層形成時の畑跡とみられ、1948年の米軍空撮写真と地割・畝の方向が一致していた。当地は遅くとも明治十三年の「迅速測図」測量時にはすでに畑地になっていることが確認できる。畝跡は第1・2号溝跡の上層にも達していたため、少なくとも両遺構が完全に埋没してから畑地として開拓されたと考えられる。前述のV'層は、あるいは畑地を作るための整地層であった可能性もある。

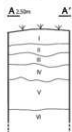
これまで毛長沼外瓦A遺跡については、昭和56年の遺跡確認調査（踏査）によって、古墳中・後期、奈良・平安および中世の遺物が採集されている（草加・八潮遺跡確認調査団1981）。今回の成果はおおむねこの認識に沿うものである。



第5図 遺跡位置図



基本土層



基本土層  
I 砂石  
II 赤褐色土 (赤土)  
III 暗褐色土 (暗作土)  
IV 黒褐色シルト質土 (耕作土)  
V 灰白色シルト質土  
VI オリーブ灰色粗砂

SD 2

a 暗褐色粘質土  
b 黒褐色粘質土  
1 黒色粘土

2 黒褐色粘土

9 黒褐色粘土

10 黒褐色粘土

遺物は稀少

炭化物粒を少量含む

マンガンや砂含む

9~10世紀の遺物を多く含む

粘性強 しまり密

やや砂含む

9~10世紀の遺物を多く含む

1層より土色やや薄く黒色粘土

と褐色粘土が交互に堆積する

黒色層には炭化物少量

粘性強 しまり密

SD 3

2 暗褐色土

4 暗褐色土

地山

B 青灰色粗砂

旧河床面か

粘性なし しまりやや密

炭化物微量含む 古墳前~中層

の遺物が含まれる

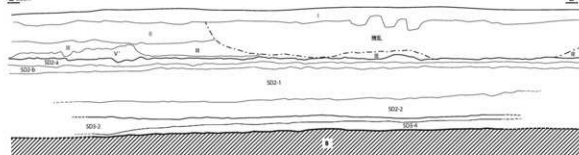
粘性やや強 しまりやや密

シルト質土をベースにB層を

多量に含む 炭化物を中量含む

粘性やや強 しまりやや粗

B 25m



0 2m 1:60

第6図 全体図と基本層序

## IV 遺構と遺物

### 1. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、溝跡2条が検出された。

#### (1) 溝跡

##### 第1号溝跡（第7・8図）

調査区北側のB-3グリッドに位置し、N-72°-Wに延びる。平面形はおおむね直線状であるが、旧地形の影響を受けてごく僅かに南西方向に膨らむ。断面形は逆台形である。調査区内での長さは8.1m、幅は0.5m、遺構検出面からの深さは0.1mを測る。

第8図に示したように、遺構検出面直上まで近代耕作土のIV層（第6図基本土層に対応）による削平を受けているため、本来の正確な規模や掘り込み面の標高は不明である。一方、第2号溝跡の掘り込み面が標高約1.6m付近と想定される（後述）ことから、さほど大きな削平は受けていない可能性が高い。覆土（第8図I層）は粒径が小さく粘性の強いシルト質土で、地山（V層）小ブロックを含むことから、埋め戻されたものと思われる。掘削時にはしばしば湧水がみられた。

図示可能な遺物は1点のみである。

第7図1は土師器の甕である。口縁部は内外面とも目の粗いハケメ工具により横位の調整が施される。胴部外面は、口縁部同様の目の粗いハケによる斜位の調整を受け、その後縦位のケズリが上方から施される。さらに横方向に太い工具によるミガキが施される。胴部内面は横位のヘラナデが施される。ハケメ調整に五領期の特徴を残す、全体の形状や最終的な調整手法は和泉期初頭の様相を呈する。

遺構の時期は、遺物から古墳時代中期初頭と推定される。

図示した他に甕片6点、壺片5点の計120gが第2表 第1号溝跡出土遺物観察表（第7図）

| 番号 | 種別  | 器種 | 口径     | 器高     | 底径 | 胎土  | 残存 | 焼成 | 色調    | 備考               | 図版  |
|----|-----|----|--------|--------|----|-----|----|----|-------|------------------|-----|
| 1  | 土師器 | 甕  | [16.6] | [17.4] | -  | H1K | 10 | 普通 | にぶい黄橙 | 外面粗いハケ後縦ケズリのちみガキ | 4-1 |

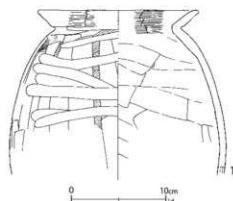
それぞれ細片で出土している。

##### 第3号溝跡（第9・10～11図）

調査区南側のC-3グリッドに位置し、N-74°-Wに延びる。第2号溝と同位置で重複しており、第2号溝の掘削終了後、遺物が下面から多量に出土したことで発見された。第1・2号溝跡と同様に耕作土（第6図第IV・V'層）によって削平を受けているため、本来の正確な規模・掘り込み面の標高は不明であるが、さほど大きな削平は受けていないようである。平面形態はおおむね直線状である。断面形はU字状であると思われる。調査区内における残存長は4.0m、幅は4.0m、遺構検出面からの深さは1.5mを測る。第1号溝とはおおむね平行であるが、第2号溝とは若干軸方向が異なる。

覆土は、第6図下の縦断面では、ある程度水平な堆積状況で腐植物も含まれてはいるが、1・2層は分厚く、互層状の堆積にはなっていない。また2・4層にはB層（第6図VI層）の砂なども多量に含まれる。遺構が埋まる際、少なくとも一時的に水流があった可能性がある。

図示可能な遺物は33点である。外面などの調整



第7図 第1号溝跡出土遺物



は摩耗して、観察できる状態のものが少なく、破断面も平滑なことが多かったため、水流によって運ばれてきたものが含まれている可能性がある。

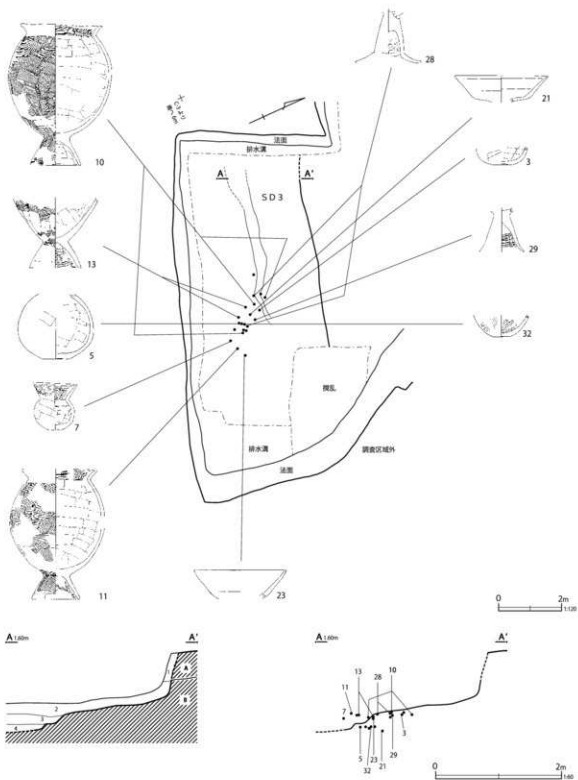
第10～11図は出土した遺物である。

1～6は壺である。1は大型化した小型壺の口縁部である。外面は横位のヘラナデ後、口縁部をヨコナデ、さらに細い工具により頸部から上方に縦位のミガキが施される。内面は横位のヘラナデが施される。全体に灰白色を呈する。2は単口縁壺の口縁部である。内外面とも横位のヘラナデが施される。内面の頸部に指頭瓦痕が残る。粘土は粒径が小さく緻密で、混入物が少ない。3は小型壺の底部である。胴部はやや扁平な球状である。外面は斜位のヘラナデ、内面は横位のヘラナデが施される。底部はへそ状にくぼむ。4は小型壺の底部である。底部はへそ状にくぼむ。5は壺の頸部より下の胴部破片である。胴部は球形で最大径が下半になる。頸部の破断面には口縁部の接合痕が見られる。外面は斜位のヘラナデが僅かに残る。内面は斜位～横位のヘラナデである。6は壺の口縁部である。口径が26cmと大型である。口縁部下端に粘土を貼付することで複合部を作り出している。器肉は厚い。灰白色で、胎土には土器をすり潰したシャモットが見られる。

7・8は小型壺である。7は摩耗しているもののほぼ完形で、2層から出土した。外面の口縁部は斜位のハケ調整で、胴部はヘラナデである。内面の口縁部は横位のハケ調整、胴部は横位のヘラナデで、頸部接続箇所は最後にナデが施される。底部はへそ状にくぼむ。8は7よりも薄手で、比較的粒径の小さい粘土で堅緻に焼成されている。外面は、胴部に横位のヘラナデが施される。口縁部はヘラナデ後端部を揃ひようにヨコナデされる。内面は胴部ヘラナデ後、口縁部をヨコナデ。9は短頸壺である。内外面ともに口縁部以外はハケ調整が施される。口縁部は揃まれた状態でヨコナデが施される。頸部外面には粘土紐の積み上げ痕を

残す。焼成は比較的堅緻である。

10～19は甕である。10・11・13・18・19は台付甕である。10はハケ調整の甕である。頸部の屈曲は強い。胴部外面は横位のヘラナデの後、縦位～斜位のハケが全面に施される。その後、横位のハケが胴部全体に施される。さらに、指頭痕を消すためか、細いハケが胴部下半に部分的に使用される。一連のハケの後、口縁部がヨコナデされる。脚部との接合は柄接合である。接合後は外面に縦位のハケが施される。脚部は斜位～横位ハケ、内面は胴部にヘラナデ、口縁部は横位にやや粗いハケが施される。その後口縁接合部には再度ヘラナデが施される。脚部内面は横位にヘラナデされる。胎土にはシャモットが見られる。11はハケ調整の甕である。頸部の屈曲は強い。外面は10と同様に縦位のハケが施された後で化粧土が塗布され、その上から横位のハケが施される。口縁部はナデ、脚部の接合部は縦位のハケが施される。脚部下端はヨコナデである。内面も10と同様にヘラナデされ、口縁部は横位のハケが施される。口縁接合部は再度ヘラナデされる。脚部は斜位～横位のハケが施される。胎土にはシャモットが見られる。12はハケ調整甕の口縁部である。頸部の屈曲は強く、端部は丸い。10・11・13よりも刷毛目は粗く、胎土には雲母が多く含まれる。外面は口縁部・胴部とも斜位のハケ調整が施される。口縁部はさらにヨコナデが加えられ、ハケが不明瞭になっている。13はハケ調整甕の下半部である。10・11よりも胴部は細身である。外面は縦位のハケ後、下位は脚部方向へのヘラケズリが施される。その後、胴部は横位のハケ、脚部・接合部は縦位のハケが施される。脚部下端部はヨコナデされる。内面は、胴部に斜位のヘラナデ、脚部に横位ハケが施される。10～13はいずれも厚く、重量感がある。14～17は口縁部である。14は頸部の屈曲が強い。外面は頸部以上がヨコナデされており、口唇部は丸いが、指で揃ひようにして外反させたため、指頭瓦痕が



SD 3

1 灰白シルト質土 A層をベースに暗褐色粘質土

小ブロック少量含む

A層とB層の混ざった層

腐植物微量含む 古墳前~中期

の遺物が含まれる

粘性やや強 しまりやや密

3 黒色シルト質土

B層と黒色土の混ざった層

腐植物を多量に含む

粘性やや強 しまりやや密

4 暗褐色土

シルト質土をベースにB層を多量に

含む層 腐植物を中量含む

粘性やや強 しまりやや粗

B層と黒色土の混ざった層

腐植物を多量に含む

粘性やや強 しまりやや密

シルト質土をベースにB層を多量に

含む層 腐植物を多量含む

粘性やや強 しまりやや粗

地山

A 灰白色シルト質土

細砂を微量含む

粘性強 しまり密

B 青灰色粗砂

旧河床面か

粘性なし しまりやや粗

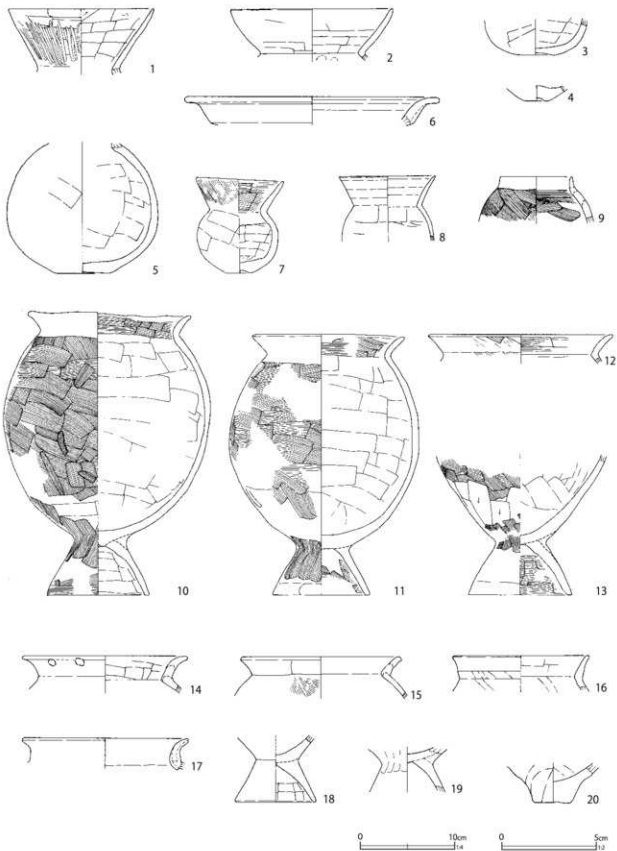
細砂を微量含む

粘性強 しまり密

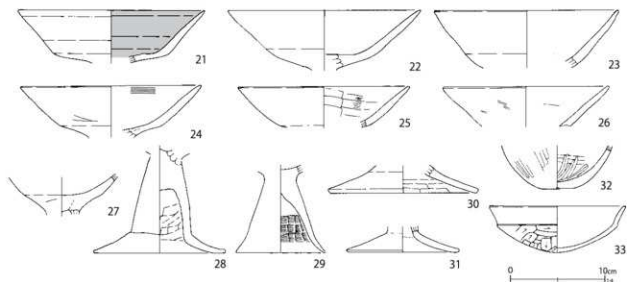
旧河床面か

粘性なし しまりやや粗

第9図 第3号溝跡・出土状況



第10图 第3号沟出土遗物(1)



第11図 第3号溝跡出土遺物(2)

残されている。内面はヘラナデされる。胎土にはシャモットが見られる。15の外表面は頸部に指ナデが施される。口唇端部に不明瞭だが面が作出され、端部が若干外反している。頸部以下は斜位のハケ調整。内面は口縁部に横位のハケ調整が施されていたようだが、指ナデに消されてほとんど見えない。16は口縁が僅かに外反し、端部は丸い。外面は斜位のヘラナデ後、口縁部がヨコナデされる。内面は頸部以下に斜位のナデで、口縁部は横位のヘラナデが施される。胎土に雲母と角閃石、酸化鉄を含む。17は口縁部が曲線的に外反する。端部は丸い。成形した口縁部に粘土を再度貼り付けて器肉を増している。内外面ともに指ナデが施される。全体に焼きムラがあり、灰白色を呈する。18は脚部である。外面は摩耗しており判然としませんが、縦位のヘラケズリが施されている。内面は横位のヘラナデで脚部成形時の絞り痕がなでつけられている。柄接合。19は甕の脚部接合部で、外面は縦位のヘラケズリが施されている。柄接合。胎土は厚みがあり、重量感がある。

20はミニチュア土器である。壺型と思われる。内外面に細いヘラによるナデが施される。底面には同様のヘラによって粘土を掻きとったような跡が見られる。胎土にはシャモットが見られる。

21～31は高坏である。高坏は全体的に内外面が摩耗しており、特に外面の摩耗が著しく、調整は判然としない。

21～26は坏部である。21は下部に段をもち、やや角度をもって立ち上がるが、ごく僅かに外反する。内面は横位のヘラナデの可能性ある。黄味がかった灰白色で、内面は赤彩されている。粘土は粒径が小さく緻密で、精選されている。含有する雲母の量が比較的多い。22は下部に段をもつ。屈曲は緩やかであるが、明瞭な稜線が作られている。坏部底面は平坦である。粘土は粒径が小さく、混入物はあるが精選されている。23は22と同一個体の可能性がある。下部に段をもち、屈曲は緩やかであるが、明瞭な稜線が作られている。粘土は粒径が小さく緻密で、精選されている。24は下部に段をもつ。外面は摩耗しており判然としませんが、斜位のヘラナデが施されている。内面も不明瞭であるが、端部に横位のハケ調整が施される。胎土は高坏の一群の中では比較的粗い。25は下部に段をもつ。内面は横位～斜位にハケ調整されている。粘土は粒径が小さく、混入物はあるが精選されている。26は破片であるが、坏部の下部の粘土紐の接合部で破断したものと思われる。第2号溝跡の第15図78と同一個体である可能性が高い。破断面

第3表 第3号溝跡出土遺物観察表 (第10・11図)

| 番号 | 種別  | 器種  | 口径     | 器高      | 底径     | 胎土        | 残存 | 焼成 | 色調    | 備考                                              | 図版   |
|----|-----|-----|--------|---------|--------|-----------|----|----|-------|-------------------------------------------------|------|
| 1  | 土師器 | 壺   | (15.4) | [7.1]   | -      | H I K     | 60 | 普通 | 灰白    | 粘土精選 内面ヘラナデ 外面ヘラナ<br>デ後縦ミガキ 口縁部・頸部指ナデ           | 4-2  |
| 2  | 土師器 | 壺   | (17.2) | 5.6     | -      | AH I K    | 15 | 普通 | 橙     | 内面ヘラナデ 粘土精選                                     | 4-3  |
| 3  | 土師器 | 小型壺 | -      | [3.9]   | 3.8    | AH I K    | 25 | 普通 | にぶい黄橙 | 内外面ヘラナデ<br>器面風化                                 | 4-4  |
| 4  | 土師器 | 小型壺 | -      | 1.6     | 2.4    | AH I K    | 25 | 普通 | 橙     | 内面指ナデ 器面風化                                      | 8-6  |
| 5  | 土師器 | 壺   | -      | -       | (5.2)  | AH I K    | 20 | 普通 | 橙     | 内面ヘラナデ 外面摩耗 東海系                                 | 4-5  |
| 6  | 土師器 | 壺   | (26.0) | [3.0]   | -      | ACH I     | 5  | 普通 | 灰白    |                                                 | 8-6  |
| 7  | 土師器 | 小型壺 | (9.2)  | 10.15   | 2.8    | AC I K    | 60 | 普通 | にぶい黄橙 | 胴部下半に煤付着 器面風化 胴部<br>内外面ヘラナデ 口縁部斜位ハケ<br>口縁内面横位ハケ | 4-6  |
| 8  | 土師器 | 小型壺 | (10.0) | [6.9]   | -      | A I K     | 20 | 普通 | にぶい黄橙 | 内面ヘラナデ 外面丁寧ナデ                                   | 8-6  |
| 9  | 土師器 | 短頸壺 | 7.6    | [4.8]   | -      | AD I K    | 25 | 良好 | にぶい橙  | 内外面上部ナデ ハケ目は粗いが強い                               | 8-6  |
| 10 | 土師器 | 台付壺 | 17.4   | 30.1    | 10.8   | AH I K L  | 80 | 普通 | にぶい橙  | 内面口縁部ハケ 胴部ヘラナデ<br>外面ヘラナデ後ハケ                     | 4-7  |
| 11 | 土師器 | 台付壺 | 16.1   | 27.6    | 10.2   | AH I K L  | 70 | 普通 | にぶい橙  | 内外面煤付着 内面ヘラナデ後ハケ<br>ヘラナデ 外面横位ハケ                 | 4-8  |
| 12 | 土師器 | 壺   | (19.4) | [2.8]   | -      | AC I K    | 10 | 普通 | 黄灰    | 内外面ハケ                                           | 8-6  |
| 13 | 土師器 | 台付壺 | -      | [14.8]  | (11.0) | AH I      | 40 | 良好 | 黄灰    | 内面粗いハケ 外面胴部ヘラナデ後<br>縦位ハケ                        | 4-9  |
| 14 | 土師器 | 壺   | (17.6) | 4.0     | -      | AH K L    | 25 | 良好 | にぶい黄橙 | 外面煤付着 ヘラナデ ヨコナデ                                 | 8-6  |
| 15 | 土師器 | 壺   | (16.3) | [4.5]   | -      | AH I K L  | 5  | 良好 | オリーブ黒 | ヨコナデ                                            | 8-6  |
| 16 | 土師器 | 壺   | (14.4) | 3.8     | -      | ACH I     | 20 | 普通 | にぶい黄橙 | 煤付着 砂っぽい ヘラナデ<br>ヨコナデ                           | 8-6  |
| 17 | 土師器 | 壺   | (17.6) | 3.3     | -      | AC I      | 15 | 良好 | 灰白    | 全体に焼きムラ ヨコナデ                                    | 8-6  |
| 18 | 土師器 | 台付壺 | -      | [7.1]   | (8.4)  | AH I L    | 50 | 良好 | 灰白    | 煤付着 内面ヘラナデ 器面風化                                 | 4-10 |
| 19 | 土師器 | 台付壺 | -      | [4.8]   | -      | A I K     | 15 | 良好 | 灰黄    | 接合部にハケ後化粧土のちヘラケズリ                               | 4-11 |
| 20 | 土師器 | にちろ | (2.0)  | 2.1     | -      | ACH I K L | 80 | 普通 | にぶい黄  | 細いヘラによるナデ                                       | 4-12 |
| 21 | 土師器 | 高坏  | (18.4) | [5.6]   | -      | AH I K    | 30 | 普通 | 灰白    | 内面赤彩 外面も赤彩か                                     | 8-7  |
| 22 | 土師器 | 高坏  | (10.2) | [6.3]   | -      | AH I      | 15 | 普通 | 橙     |                                                 | 8-7  |
| 23 | 土師器 | 高坏  | (19.2) | -       | -      | AH I K    | 10 | 普通 | にぶい黄橙 | 内外面風化                                           | 8-7  |
| 24 | 土師器 | 高坏  | (19.4) | 6.1     | -      | AH I K    | 20 | 普通 | 橙     | 器面風化 粘土精選                                       | 8-7  |
| 25 | 土師器 | 高坏  | (18.2) | 4.3     | -      | ACH I K   | 20 | 普通 | 橙     | 内面ハケ 器面風化                                       | 8-7  |
| 26 | 土師器 | 高坏  | (19.6) | 4.2     | -      | AGH I K   | 30 | 普通 | 橙     | 内外面ハケ 器面風化                                      | 8-7  |
| 27 | 土師器 | 高坏  | -      | 4.2     | -      | AH I K    | 30 | 普通 | にぶい赤褐 | ホソ接合ヘソ 器面風化 粘土精選                                | 8-7  |
| 28 | 土師器 | 高坏  | -      | [11.55] | (14.0) | AH I K    | 50 | 普通 | にぶい黄褐 | ホソ接合 内面ヘラナデ 外面風化                                | 4-13 |
| 29 | 土師器 | 高坏  | -      | [9.3]   | (9.2)  | AC I K    | 15 | 普通 | 灰黄    | 内面ハケ後ナデ 器面風化                                    | 4-14 |
| 30 | 土師器 | 高坏  | -      | [3.0]   | (15.5) | AH I K    | 20 | 普通 | 橙     | 内面ヘラナデか 器面風化                                    | 8-7  |
| 31 | 土師器 | 高坏  | -      | [2.7]   | (12.0) | AH I K    | 25 | 普通 | 黄灰    | 器面風化                                            | 8-7  |
| 32 | 土師器 | 壺   | -      | [4.6]   | 3.4    | AC I K    | 55 | 普通 | 灰黄    | 内面横ミガキ後縦ミガキ<br>器面風化 外面縦ミガキ                      | 4-15 |
| 33 | 土師器 | 模倣坏 | (14.4) | [4.9]   | -      | -         | 15 | 良好 | 灰白    | 小針型坏 下半分ヘラケズリ<br>粘土精選                           | 4-16 |

には接着面積を増やすためにハケが施される。不明瞭であるが、外面に斜位のハケが施されている。粘土は粒径が小さく、混入物はあるが精選されている。27は坏部と柱状部の接合部である。接合方法は柄接合で坏部の下部には段をもつ。外面は斜

位～横位のヘラナデが施される。粘土は粒径が小さく緻密で、精選されている。

28～31は高坏の脚部である。28は器内が厚く、重量感がある。外面は著しい摩耗で判然としないが、縦位のケズリが施されている可能性がある。

脚部内面は、柱状部製作時に生じた絞り痕を棒状工具で掻きとった後、ヘラナデが施される。柄接合である。29は内面に横位のハケ調整が施されたのち、端部がヨコナデされている。外面は著しい摩耗で判然としなが、縦位のケズリが施されている可能性がある。柄接合である。30・31は高坏の裾部である。30の端部は面取りされている。外面は著しい摩耗で判然としなが、丁寧に横位のナデを受けている。内面は横位のヘラナデが施される。粘土は粒径が小さく、混入物はあるが精選されている。31は柱状部が直立するタイプである。外面は非常に丁寧にナデが施されている。粘土は粒径が小さく緻密で、精選されている。

32は壺としたが、壺や鉢の可能性もある。底部は比較的小さく、胴部は半球形を呈すると思われる。内面が黒色を呈し、ミガキが施されているが、いわゆる内黒土器ではなく、黒斑であろう。外面には縦位の粗いハケ後ミガキ、内面は横位のミガキ後、放射状に縦位のミガキが施される。

1～32の遺物は古墳時代中期初頭、和泉式古段階（5世紀初頭）に位置づけられる。全体に、壺や小型壺、高坏には、粒径の小さな精選された粘土が使用される傾向を見せるが、甕に使用される

粘土にはシャモットが入るなど器種による粘土の使い分けが見られる。

33は模倣坏である。不純物の少ない、極めて精選された粒径の小さな粘土で堅緻に、灰白色に焼成されている。下半部のヘラケズリは周辺部から内側へ向かい、工具痕が明瞭である。口縁は軽く外反し、端部は棒状の工具によって丁寧に面が作出されている。いわゆる「小針型坏」である。形状・胎土・成形手法のいずれも、いわゆる小針型坏が大型化する前の古い段階の特徴に合致し、6世紀中葉の所産と考えられる。4層からの出土であるが、重複する第2号溝跡との年代とも合致しないため、第3号溝が埋まりきる以前に混入したものと思われる。

また、この他に獣骨が2点出土している。いずれもウマで、第2層から出土している。1点は指骨（基節骨）で、全長約7.8cm、幅約4.2cm、乾燥状態で40gを測る。完形であるが、前後肢の区別は判然としない。もう1点は中手骨もしくは中足骨である。下部のみが約4.0cm残存し、幅約3.9cm、乾燥状態で13gを測る。

図示した他に、遺構内からは、壺、甕、高坏片などが合計1,245g出土している。

## 2. 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、溝跡1条が検出された。

### （1）溝跡

#### 第2号溝跡（第12・13～15図）

調査区南側のB-1グリッドからC-3グリッドにかけて位置し、N-70°-Wに延びる。第3号溝跡と完全に重複しているが、軸方向は若干ずれている。遺構検出面直上までIV層およびV'層（第6図）による攪乱を受けて削平されているが、第3層（崩落土）の流入角度から、掘り込み面の標高はおよそ1.6m付近と推定される。平面形は直線状である。断面形はU字状であり、底面は平坦であったと考えられる。検出された長さは22.5

m、幅は3m、遺構検出面からの深さは1mを測る。

遺跡周辺は自然堤防の際に位置する（第2図1）ため、第2号溝跡は、自然地形である可能性も考えたが、第3号溝跡の第1層を急な角度で掘り込んでいたため、溝跡とした。ただし、第3号溝跡と完全に重複するため、第3号溝跡が完全に埋没する前に同方向に掘り直したと見られる。

覆土については、第2号溝跡出土遺物の多くが1層から出土しているため、廃棄などに伴う人為的な埋め戻し層の可能性もある。また、III章には縦方向の断面図（第6図下）を示したが、1層に

前後して、黒色土と暗褐色土が水平に薄く交互に重なる層（SD2-a・SD2-b・SD2-2層）が堆積している。これは、有機物の周期的な繁茂に伴う自然堆積層と推定される。加えて、3層はA層の崩落土、4層は自然堆積層である。これらの点から、第2号溝跡が構築されてから、土師器の遺棄などの前に（3層の崩落後もなお）溝としての機能が保持された静的な環境が一定期間継続した可能性がある。また、1層堆積後も窪みのような状態で、完全に埋没するまで静的な環境があったと考えられる。

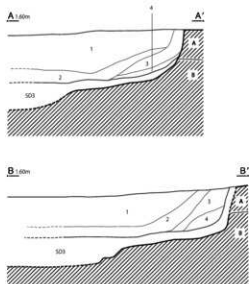
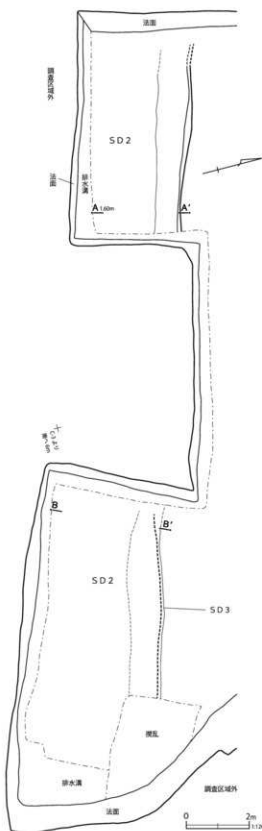
図示可能な遺物は88点である。出土当初は調整などを視認できるものが多かったが、取り上げ・水洗などを経て剥離・摩耗・溶融し、調整が視認できなくなったものもある。これらについて、写真などの記録から確認しえたものには観察表（第4表）に「底部回転糸切（摩耗）」のように記載した。なお、器面全体の摩耗は単に「摩耗」として記載した。また、前述のように、第2号溝跡は第3号溝跡の掘り直しであるため、出土遺物には本来第3号溝跡のものと思われる古墳時代のもの（75～84）が散見される。

第13～15図は出土した遺物である。

1～27はロクロ土師器の坏である。1は底部回転糸切後、周辺ヘラケズリされている。粘土は粒形が小さく緻密で比較的重量感がある。2は底部回転糸切である。口唇端部が肥厚し、小さく外反する。3は底部回転糸切である。内面は比較的丁寧なロクロナデされている。口縁は僅かに外反する。4の口縁も小さく外反するが、内外面とも器面の摩耗が著しく調整は判然としない。粘土は粒径小さく精選されている。5・6は底部回転糸切で、摩耗している。底部は比較的分厚い。口縁は僅かに外反する。内外面はロクロナデで調整されている。7は底部回転糸切で、摩耗している。口縁は外反する。内外面をロクロナデで調整している。8は底部回転糸切で、底面に切屑が残る。や

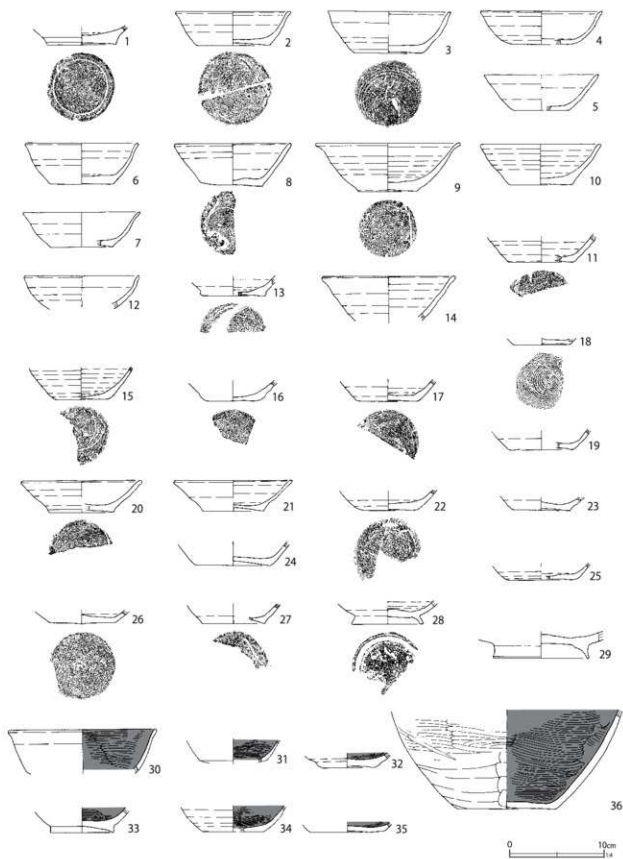
や歪みが見られる。9は底部回転糸切である。口縁は強く外反する。10は底部回転糸切後周辺ヘラケズリが施される。口縁は僅かに外反する。粘土は粒径が小さく緻密で、精選されている。11は底部回転糸切で、摩耗している。12は口縁が僅かに外反する。内外面とも摩耗が著しい。粘土は粒径が小さく緻密で、精選されている。13は底部回転糸切である。底部は高台状にやや肥厚する。14は口唇端部が肥厚し、若干外反する。雲母・角閃石・白色粒子を多く含み、砂質の胎土である。15は底部回転糸切で、全体に摩耗しており、内外面の調整は判然としない。16は底部回転糸切後に底部外周が指ナデされており僅かに括れる。17は底部回転糸切で、全体に摩耗しており、内外面の調整は判然としない。見込み部分に沈線状に渦巻形のロクロ痕が平面的に残されている。18は底部回転糸切である。見込み部分に渦巻状にロクロ痕を残し、一部に煤が付着している。粘土は混入物が少なく、堅緻に焼成されている。19は底部回転糸切で、全体に著しく摩耗しており、調整は判然としない。20～26は器高の低い一群である。20は底部回転糸切である。21は底部回転糸切で、全体に摩耗している。口唇端部が肥厚し僅かに外反する。見込み部分は中央がやや盛り上がるが非常に薄い。22は底部回転糸切である。23は底部回転糸切で、全体に著しく摩耗しており、調整は判然としない。見込み部分に渦巻状に立体的なロクロ痕が残される。24は底部回転糸切で、全体に著しく摩耗しており、その他の調整は判然としない。見込み部分は中央がやや盛り上がる。25・26は底部回転糸切で、全体に著しく摩耗しており、その他の調整は判然としない。26は見込み部分に渦巻状に立体的なロクロ痕を残す。雲母・角閃石・白色粒子を多く含み、砂質の胎土である。14と同一個体の可能性がある。27は底部回転糸切である。見込み部分は中央がやや盛り上がり、非常に薄い。

28は高台坏である。底部回転糸切である。見込

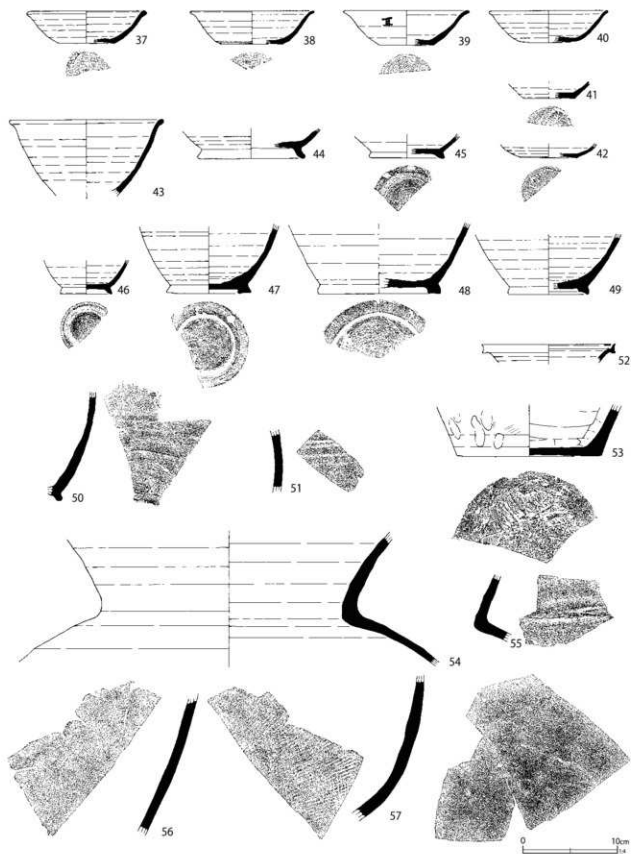


- SD2
- 1 黒色粘土 マンガンやや含む 9～10世紀の遺物を多く含む  
粘性強 しまり密
- 2 黒褐色粘土 やや砂含む 9～10世紀の遺物を多く含む  
1層より土色やや薄く黒色粘土と褐色粘土が交互に堆積する  
黒色層には腐植物少量  
粘性強 しまり密
- 3 灰白色粘土 粘土ブロック多く含む(地山) A層の崩落によるもの  
粘性強 しまり密
- 4 黒色粘土 マンガンやや含む→腐植物少量含む  
粘性強 しまり密
- A 灰白色シルト質土 地山 細砂を微量含む 粘性強 しまり密
- B 青灰色粗砂 旧河床面か  
粘性なし しまりやや密

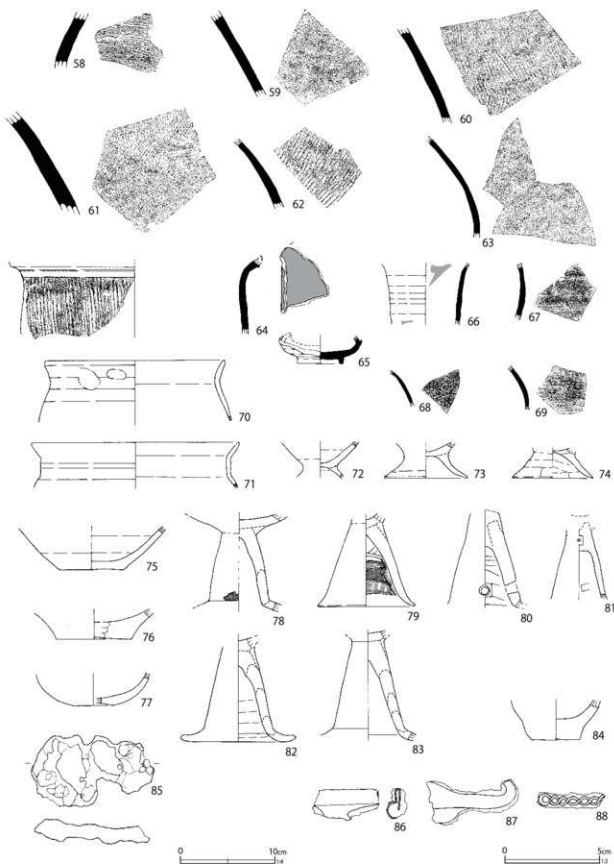
第12図 第2号溝跡



第13图 第2号沟出土遗物(1)



第14图 第2号沟跡出土遺物(2)



第15图 第2号沟跡出土遺物(3)

第4表 第2号溝跡出土遺物観察表 (第13～15図)

| 番号 | 種別     | 器種  | 口径     | 器高     | 底径     | 胎土      | 残存 | 焼成 | 色調    | 備考                                               | 図版   |
|----|--------|-----|--------|--------|--------|---------|----|----|-------|--------------------------------------------------|------|
| 1  | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [2.0]  | 7.2    | AH I    | 90 | 普通 | にぶい黄  | 底部回転糸切 摩耗 粘土精漉                                   | 4-17 |
| 2  | ロクロ土師器 | 坏   | (11.6) | 3.6    | 8.0    | AB I K  | 50 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切                                           | 4-18 |
| 3  | ロクロ土師器 | 坏   | (12.8) | 4.4    | (7.2)  | ACH I K | 30 | 普通 | 浅黄橙   | 底部回転糸切 内面クロナデ                                    | 5-1  |
| 4  | ロクロ土師器 | 坏   | (12.8) | [3.5]  | (6.2)  | AHK     | 20 | 普通 | 浅黄橙   | 内外面とも摩耗 粘土精漉                                     | 5-2  |
| 5  | ロクロ土師器 | 坏   | (12.2) | [3.8]  | (6.0)  | ACH I   | 15 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切 (摩耗)                                      | 5-3  |
| 6  | ロクロ土師器 | 坏   | (11.8) | 4.4    | (6.8)  | AHK     | 45 | 普通 | 灰黄    | 底部回転糸切 (摩耗) 内外面クロ<br>ナデ 粘土精漉                     | 5-4  |
| 7  | ロクロ土師器 | 坏   | (12.4) | 3.7    | (6.6)  | AHK     | 30 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切 (摩耗) 内外面クロ<br>ナデ                          | 5-5  |
| 8  | ロクロ土師器 | 坏   | 12.2   | 4.5    | 6.6    | AHK     | 55 | 普通 | 褐灰    | 底部回転糸切後無調整                                       | 5-6  |
| 9  | ロクロ土師器 | 坏   | (14.8) | 5.1    | 6.0    | AH      | 40 | 普通 | にぶい黄橙 | 底部回転糸切                                           | 5-7  |
| 10 | ロクロ土師器 | 坏   | (12.4) | 4.3    | (6.7)  | HK      | 45 | 普通 | 淡橙    | 底部回転糸切後ヘラケズリ 粘土精漉                                | 5-8  |
| 11 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [3.1]  | 7.0    | A I K   | 25 | 普通 | 灰黄    | 底部回転糸切 摩耗                                        | 5-9  |
| 12 | ロクロ土師器 | 坏   | 12.0   | [3.5]  | -      | I K     | 40 | 普通 | 橙     | 著しく摩耗 粘土精漉                                       | 8-8  |
| 13 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [2.1]  | (3.5)  | AH I K  | 40 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切                                           | 5-10 |
| 14 | ロクロ土師器 | 坏   | 13.8   | [4.7]  | -      | AC I K  | 25 | 普通 | 灰白    |                                                  | 8-8  |
| 15 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [3.4]  | 5.6    | AH I    | 50 | 普通 | 浅黄橙   | 底部回転糸切 摩耗                                        | 5-11 |
| 16 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [2.2]  | (6.0)  | AC I    | 25 | 普通 | 灰黄褐   | 底部回転糸切                                           | 5-12 |
| 17 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [2.4]  | (6.4)  | BH I    | 50 | 普通 | 浅黄橙   | 底部回転糸切 摩耗                                        | 5-13 |
| 18 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [0.7]  | (6.0)  | I J     | 10 | 良好 | 褐灰    | 底部回転糸切 内面煤付着                                     | 8-8  |
| 19 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [2.1]  | (6.4)  | ACH I K | 20 | 普通 | 灰黄    | 底部回転糸切 (摩耗)                                      | 5-14 |
| 20 | ロクロ土師器 | 坏   | (12.2) | 3.3    | (7.0)  | AC I K  | 20 | 普通 | 灰黄    | 底部回転糸切                                           | 5-15 |
| 21 | ロクロ土師器 | 坏   | (12.4) | [3.2]  | (6.4)  | I K     | 50 | 普通 | 浅黄橙   | 底部回転糸切 内外面とも摩耗                                   | 5-16 |
| 22 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [2.1]  | (6.0)  | AH I    | 25 | 普通 | にぶい黄橙 | 底部回転糸切                                           | 5-18 |
| 23 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [1.4]  | 6.2    | ACH I K | 30 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切                                           | 5-19 |
| 24 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [2.5]  | (8.0)  | ACH K   | 20 | 普通 | 浅黄橙   | 底部回転糸切 (摩耗)                                      | 5-17 |
| 25 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [1.8]  | (7.0)  | H I     | 20 | 普通 | 浅黄橙   | 底部回転糸切 (摩耗)                                      | 5-20 |
| 26 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [1.4]  | 7.0    | A I K   | 80 | 普通 | 浅黄    | 底部回転糸切 (摩耗)                                      | 5-21 |
| 27 | ロクロ土師器 | 坏   | -      | [2.1]  | (6.6)  | AHK     | 20 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切 (摩耗)                                      | 6-1  |
| 28 | 土師器    | 高台坏 | -      | [2.45] | (7.6)  | GH      | 25 | 不良 | 白     | 底部回転糸切 焼成不良 非在地系                                 | 6-2  |
| 29 | 土師器    | 高台坏 | -      | [2.8]  | 10.0   | A I K   | 60 | 普通 | にぶい黄橙 |                                                  | 6-3  |
| 30 | 土師器    | 坏   | (15.4) | [4.7]  | -      | I K     | 15 | 普通 | 淡黄    | 内黒 内面ミガキ                                         | 6-4  |
| 31 | 土師器    | 坏   | -      | [2.4]  | (7.0)  | AB      | 25 | 普通 | 灰黄    | 内黒 内面細かいミガキ                                      | 6-5  |
| 32 | 土師器    | 坏   | -      | [1.5]  | 6.0    | H I K   | 15 | 普通 | 黒     | 内黒 内面放射状にミガキ 外面摩耗                                | 6-6  |
| 33 | 土師器    | 坏   | -      | [2.6]  | 6.6    | A I     | 70 | 普通 | 淡黄    | 内黒 内面ミガキ 下総か                                     | 6-7  |
| 34 | 土師器    | 坏   | -      | [2.8]  | (6.4)  | A I     | 25 | 普通 | 灰黄    | 内黒 内面細かいミガキ                                      | 6-8  |
| 35 | 土師器    | 坏   | -      | [1.1]  | 7.8    | A I     | 60 | 普通 | 灰白    | 内黒 外面底部煤付着 底部周縁部<br>ヘラケズリ 内面全体にミガキ<br>底部同心円状にミガキ | 6-9  |
| 36 | 土師器    | 鉢   | -      | [10.5] | (10.4) | AC I    | 20 | 良好 | 浅黄    | 内黒 内面底部は網目状にミガキ<br>外面底部はケズリのち周縁をケズリ<br>下総        | 6-10 |
| 37 | 須恵器    | 坏   | (12.2) | 3.4    | (5.8)  | G       | 35 | 普通 | 灰     | 底部回転糸切 無調整 東金子か                                  | 6-11 |
| 38 | 須恵器    | 坏   | (12.8) | [3.5]  | (6.6)  | BG      | 20 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切 末野                                        | 6-12 |
| 39 | 須恵器    | 坏   | (13.4) | [3.7]  | (5.8)  | H I     | 45 | 良好 | 灰白    | 底部回転糸切 墨書「耳」か<br>非在地系                            | 6-13 |
| 40 | 須恵器    | 坏   | (12.5) | [3.4]  | (4.2)  | H J     | 35 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切 内外面ヒタスキか<br>南比金                           | 6-14 |
| 41 | 須恵器    | 坏   | -      | [1.9]  | (5.4)  | G       | 35 | 普通 | 灰     | 底部回転糸切 東金子                                       | 6-15 |
| 42 | 須恵器    | 坏   | -      | [1.5]  | (6.0)  | BG      | 15 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切 末野                                        | 6-16 |

| 番号 | 種別   | 器種  | 口径     | 器高      | 底径     | 胎土       | 残存 | 焼成 | 色調               | 備考                                | 図版   |
|----|------|-----|--------|---------|--------|----------|----|----|------------------|-----------------------------------|------|
| 43 | 須恵器  | 埴   | (16.2) | [8.1]   | -      | I J      | 20 | 普通 | 灰                | 内面自然釉 南比企か                        | 8-8  |
| 44 | 須恵器  | 高台埴 | -      | [3.1]   | (11.0) | BH       | 15 | 普通 | 灰                |                                   | 6-17 |
| 45 | 須恵器  | 高台埴 | -      | [2.6]   | (8.0)  | G I      | 10 | 普通 | 灰                | 底部回転糸切 底部ヘラケズリ                    | 6-18 |
| 46 | 須恵器  | 高台埴 | -      | [3.6]   | (5.4)  | G        | 30 | 普通 | 灰                | 底部回転糸切                            | 6-19 |
| 47 | 須恵器  | 長頸壺 | -      | [7.2]   | 8.8    | I K      | 70 | 普通 | 灰白               | 底部回転ヘラ切 東金子                       | 7-1  |
| 48 | 須恵器  | 長頸壺 | -      | [7.5]   | (13.0) | G        | 15 | 普通 | (表) 褐灰<br>(裏) 灰黄 | 底部回転糸切 東金子                        | 7-2  |
| 49 | 須恵器  | 長頸壺 | -      | [6.4]   | (8.4)  | G        | 45 | 普通 | 暗灰黄              | 東金子                               | 7-3  |
| 50 | 須恵器  | 長頸瓶 | -      | [11.5]  | -      | I        | 5  | 普通 | 灰                | 東金子                               | 8-8  |
| 51 | 須恵器  | 瓶   | -      | [6.7]   | -      | H        | 5  | 普通 | 灰                |                                   | 8-8  |
| 52 | 須恵器  | 長頸瓶 | (16.8) | [2.0]   | -      | I        | 10 | 良好 | 灰白               | 外面黒色自然釉 広口瓶                       | 8-8  |
| 53 | 須恵器  | 甕   | -      | [5.5]   | (15.4) | I J      | 40 | 不良 | 灰赤               | 内面ヘラナゲ タタキ痕わずかに残る<br>指頭圧痕 南比企 9 C | 7-4  |
| 54 | 須恵器  | 甕   | -      | [14.2]  | -      | B I      | 20 | 良好 | 灰                | 東金子か                              | 7-5  |
| 55 | 須恵器  | 甕   | -      | [7.2]   | -      | B I      | 10 | 普通 | 灰                | 内面自然釉 末野か                         | 8-8  |
| 56 | 須恵器  | 甕   | -      | [15.8]  | -      | I        | 5  | 普通 | 灰白               | 当て具痕 湖西 8 C 前か                    | 8-8  |
| 57 | 須恵器  | 甕   | -      | [15.4]  | -      | -        | 10 | 普通 | 灰白               | 内面底部降灰 東海系か 粘土精造                  | 8-9  |
| 58 | 須恵器  | 甕   | -      | [4.0]   | -      | B I      | 5  | 普通 | 灰                | 波状文(内に自然釉) 南比企                    | 8-9  |
| 59 | 須恵器  | 甕   | -      | [9.1]   | -      | B I      | 5  | 普通 | 灰                | 内面・断面砥具転用 外面自然釉<br>南比企            | 8-9  |
| 60 | 須恵器  | 甕   | -      | -       | -      | I        | 5  | 普通 | 灰                | 南比企                               | 8-9  |
| 61 | 須恵器  | 甕   | -      | [11.0]  | -      | B        | 5  | 普通 | 灰                | 末野                                | 8-9  |
| 62 | 須恵器  | 甕   | -      | [7.4]   | -      | B I      | 5  | 普通 | 灰                | 南比企                               | 8-9  |
| 63 | 須恵器  | 広口瓶 | -      | [10.7]  | -      | A I      | 5  | 普通 | 灰                | 外面自然釉                             | 8-9  |
| 64 | 須恵器  | 甕   | (26.5) | [8.1]   | -      | AG I     | 15 | 不良 | 暗灰               | 下継                                | 8-10 |
| 65 | 灰釉陶器 | 耳皿  | -      | -       | (4.8)  | K        | 20 | 良好 | 灰白               | 東海か 9 C                           | 7-6  |
| 66 | 灰釉陶器 | 長頸瓶 | -      | [6.6]   | -      | -        | 25 | 良好 | 灰白               | 鎗投 9 C                            | 8-10 |
| 67 | 灰釉陶器 | 長頸瓶 | -      | [6.1]   | -      | K        | 5  | 普通 | 灰白               | 鎗投                                | 8-10 |
| 68 | 灰釉陶器 | 長頸瓶 | -      | [3.8]   | -      | -        | 5  | 普通 | 褐灰               | 外面灰釉 内面煤付着 鎗投 9 C 前               | 8-10 |
| 69 | 灰釉陶器 | 長頸瓶 | -      | [4.7]   | -      | -        | 5  | 普通 | 褐灰               | 外面灰釉 鎗投 9 C 前                     | 8-10 |
| 70 | 土師器  | 甕   | (19.0) | [6.5]   | -      | ACHK     | 15 | 普通 | 灰白               | 内面摩耗 9 C 末                        | 8-10 |
| 71 | 土師器  | 甕   | (22.0) | [4.9]   | -      | ABHIK    | 5  | 普通 | にぶい褐             | ロの字壁 9 C 半ば                       | 8-10 |
| 72 | 土師器  | 台付甕 | -      | [4.0]   | -      | AC       | 25 | 普通 | にぶい褐             |                                   | 7-7  |
| 73 | 土師器  | 台付甕 | -      | [3.7]   | (8.6)  | AB I     | 70 | 普通 | 暗褐灰              |                                   | 7-8  |
| 74 | 土師器  | 台付甕 | -      | [3.2]   | (8.6)  | AH I     | 25 | 普通 | にぶい橙             | 雲母多い 外面指ナゲ 内面ヘラナゲ                 | 7-9  |
| 75 | 土師器  | 壺   | -      | [4.6]   | (6.6)  | ACGIK    | 25 | 普通 | にぶい黄褐            | 古墳前期                              | 7-10 |
| 76 | 土師器  | 壺   | -      | [3.2]   | (8.0)  | A        | 20 | 普通 | 灰黄               | 外面摩耗                              | 7-11 |
| 77 | 土師器  | 小型壺 | -      | [3.4]   | 4.0    | AH I K   | 25 | 普通 | にぶい橙             |                                   | 8-10 |
| 78 | 土師器  | 高坏  | -      | [10.25] | -      | ACH I KL | 80 | 普通 | 橙                | 外面とも摩耗                            | 7-12 |
| 79 | 土師器  | 高坏  | -      | [9.8]   | 10.4   | AC I K   | 90 | 普通 | にぶい黄橙            | 内面ハケ後下端ナゲ 外面摩耗                    | 7-13 |
| 80 | 土師器  | 高坏  | -      | [10.0]  | -      | HI K     | 50 | 普通 | 浅黄橙              | 外面摩耗 孔は前方のみ                       | 7-14 |
| 81 | 土師器  | 高坏  | -      | [7.3]   | -      | AH I     |    | 普通 | 橙                | 脚部ホゾ結合 外面摩耗 孔は貫通しない               | 7-15 |
| 82 | 土師器  | 高坏  | -      | [11.1]  | (12.2) | ACH I K  | 15 | 普通 | にぶい橙             | 内面ナゲ 外面摩耗                         | 7-16 |
| 83 | 土師器  | 高坏  | -      | [11.7]  | -      | AC I K   | 90 | 普通 | にぶい黄橙            | 内面ヘラナゲ 外面摩耗                       | 7-17 |
| 84 | 土師器  | シチフ | -      | [2.1]   | 2.7    | A I K    | 15 | 普通 | 灰黄               |                                   | 7-18 |
| 85 | 鉄滓   | 鍛冶滓 | 長さ12.2 | 幅7.6    | 厚さ2.3  | 重さ385.2g |    |    |                  | 磁着強い 梃形滓                          | 8-5  |
| 86 | 鉄製品  | 不明品 | 長さ3.45 | 幅1.65   | 厚さ0.75 | 重さ3.4g   |    |    |                  |                                   | 8-5  |
| 87 | 鉄製品  | 不明品 | 長さ4.7  | 幅2.2    | 厚さ1.1  | 重さ21.4g  |    |    |                  | 先端フック状に屈曲                         | 8-5  |
| 88 | 鉄製品  | 不明品 | 長さ3.5  | 幅0.65   | 厚さ0.65 | 重さ2.1g   |    |    |                  | 鎖状にねじれ                            | 8-5  |

み部分は中央がやや盛り上がる。焼成不良で、全体に白く発色している。非在地系の胎土である。29は高台埴とした。見込み部分は中央がやや盛り上がる。

30～36は内面黒色処理の土器である。30～35は坏である。30～34は内面に横位の非常に細かいミガキが施される。32は見込み部分に放射状のミガキが施される。33は回転糸切後に高台部が貼付される。見込み部分は単一の方向にミガキが施される。34は見込み部分に同心円状のミガキが施される。35は底部回転糸切後、周辺部がヘラケズリされる。見込み部分は同心円状にミガキが施される。全体に摩耗している。36は鉢である。外面は横位のヘラケズリ後、やや粗い横位のミガキが施される。底面はヘラケズリ後、周辺部にもう一度ヘラケズリが施される。内面には横位のミガキが非常に細かく施される。見込み部分は2方向から格子状にミガキが施される。胎土に角閃石が含まれ、坏類に比べて焼成は堅緻である。

37～64は須恵器である。産地については判別しうるもののみを記載した。全体的に東金子産と南比企産が同数で並び、加えて末野、東海系、下総系がある。

37～42は坏である。いずれも底部回転糸切である。37は口唇端部が僅かに肥厚する。底部は非常に薄い。東金子産である。38は口縁部が外反する。末野産。39は口縁部が外反し、直下に墨書がみられる。「耳」と読めるが「耳」「宣」の可能性も考えられる。40は南比企産である。41は東金子産である。42は末野産で、胎土と色調から38と同一個体の可能性がある。43は埴とした。口唇端部がやや肥厚し、外面口縁直下に重ね焼き痕がある。内面には自然釉が付着している。南比企産と思われる。

44～46は高台付埴である。44は皿の可能性もある。45は底部ヘラケズリ後、周辺ヘラケズリ、さらにその後高台が取り付けられている。46は底

部回転糸切後に周辺部に軽くナデが施され、高台が取り付けられている。

47～49は長頸甕である。いずれもやや扁平な高台が取り付けられている。東金子産である。47は底部回転ヘラ切。48は底径が13.0cmと大振りで、底部回転糸切後に高台が取り付けられる。50は長頸甕である。東金子産である。51は明確な器種は不明で、瓶類としたが、鉢の可能性もある。52は長頸甕としたが、横瓶の可能性もある。長頸甕としては広口のため、9世紀代のものであろう。

53～62は甕である。53は平底で、内面にヘラナデが施され、僅かに煤が付着している。外面にタタキ痕跡が僅かに残り、指頭王痕がみられる。9世紀代のものであろう。南比企産である。54は大甕の頸部である。東金子産と思われる。55は甕の頸部破片である。末野産と思われる。56は胴部片で、湖西産と思われる。内面に当て具痕が同心円状にみられる。灰白色に発色する。8世紀前半に位置づけられ、混入と考えられる。57は丸底で、内面底部付近には降灰の結果と思われる自然釉が部分的にみられる。灰白色に発色する。59～62は胴部片である。58～60・62は南比企産、61は末野産である。58は頸部片で、形骸化した波状文が施文されている。59は甕の胴部片が転用された転用砥具である。内面と断面の一部が研磨を受けて平滑化している。外面には自然釉が付着している。

63は広口瓶の肩部と思われる。外面に自然釉が付着する。64は甕である。頸部以下一面に縦方向のタタキ痕がみられる。焼成は悪く土師器と大差がない。下総産と思われる。

65～69は灰釉陶器である。65は耳皿である。高台の接地部には面が作出され、やや角張っている。灰釉は上面から見える範囲に比較的分厚くハケ塗りされている。9世紀前半の東海系と考えられる。胎土には黒色の混入物が見られる。66は広口の長頸甕と考えられる。灰釉は内面の一部に垂れが見られ、外面頸部に僅かにハケ痕が見える。9世紀

代と考えられる。猿投産と思われる。67は長頸瓶の胴部片である。猿投産と思われる。68・69はいずれも長頸瓶の胴部片である。いずれも9世紀前半代と思われる。同一個体の可能性がある。猿投産と思われる。

70～74は土師器の甕である。70は粗雑なつくりの武蔵型甕である。胎土に砂が混ぜ込まれている。指頭圧痕を明瞭に残す。胴部に横位のヘラケズリが施されているが、頸部は屈曲が弱く、面をもたない。9世紀末に位置づけられる。71は武蔵型甕である。全体に薄手で、頸部は直立し、胴部は横位にケズリが施される。にぶい橙色で堅緻に焼成されている。9世紀の半ばに位置づけられる。72は小型台付甕の脚部とした。内外面とも摩耗が見られ、調整は判然としなが、僅かに斜位のヘラケズリが認められる。脚部は甕の底部に貼り付けられている。73・74は小型台付甕の脚部である。73は摩耗が見られ、調整は内外面とも判然としない。外面下端は横位にナデが施される。脚部は甕の底部に貼り付けられている。74は外面が横位、内面が斜位にナデられる。その後、下端にヨコナデが施される。脚部は甕の底部に貼り付けられている。

75～84には古墳時代中期の古相を示すものを一括した。この一群については、一様に外面の摩耗が見られ、破断面も丸くなっていた。第2号溝跡と完全に重複している、第3号溝跡からの混入と考えられる。

75～77は壺である。75・76は壺の底部とした。75の胎土は粗く、古墳前期に遡る可能性がある。76の胎土は緻密である。75よりも立ち上がりは急であり、台付でない土師器甕の底部とも捉えられる。摩耗しており、調整は内外面とも不明である。77は小型壺とした。ヘソ状にくぼみ底部は第3号溝跡で出土した小型壺に類似する。外面の一部に煤が付着している。摩耗により内外面の調整は不明である。

78～83は高坏である。78は外面の裾部と柱状部の接合部にハケ調整痕が僅かに残る。坏部と柱状部は別個に製作され、後から接合されている。坏部下位の段の破断面には、接着面積を増やすためのハケ痕が見られる。第3号溝跡の第11図26と同一個体である可能性が高い。粘土は粒径が小さく、混入物はあるが精選されている。79は柱状部がハの字に開き、裾部が未発達な前期の特徴を残す。柱状部内面の絞りを、棒状の工具で掻きとった痕跡がある。工具痕以下は斜位・横位のハケで、端部はナデである。接合は柱状部と坏部の別作り接合である。80は柱状部下部に、外面からの焼成前片側穿孔が施されている。径は約9mmである。柄接合の可能性が高い。内面は横位のヘラナデである。81は柱状部上部に孔があるが貫通せず、径も約4mmと小さい。内面は摩耗しているが、横位のヘラナデ痕が一部に残る。柄接合の可能性が高い。82は柱状部と坏部の別作り接合である。裾部の発達は小さい。内面は横位のナデ調整。83は柱状部と坏部の別作り接合である。摩耗により内外面の調整は判然としない。

84はミニチュア土器である。

85は鉄滓である。断面形は碗形でないが、磁着があり、下面に砂質土、上面に溶融したガラスの一部が付着することから、碗形滓と判断した。86～88は鉄製品である。86は薄い板状の金属製品を折り込んでいる。87は先端がフック状に曲がっている。88は糸状の金属が鎖状にねじれた状態で連なっている。

遺物の時期は、8世紀代から9世紀末まで幅があるが、9世紀後半が中心となる。

図示した他に、土師器坏、甕、高坏、須恵器甕などの細片が計4,635g出土している。

## (2) グリッド出土遺物

調査区内出土遺物のうち、図示可能なものは4点である。すべて遺構検出時に第2号溝跡の直上から出土したものである。

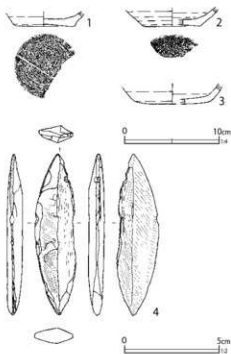
第5表 溝跡一覧表 (第8・9・12図)

| No. | グリッド           | 走行      | 長さ<br>(m) | 幅 (m)  |        | 深さ (m) |      | 断面形 | 重複遺構    |
|-----|----------------|---------|-----------|--------|--------|--------|------|-----|---------|
|     |                |         |           | 最大     | 最少     | 最大     | 最少   |     |         |
| 1   | B-3            | N-72°-W | (8.10)    | 0.46   | 0.36   | 0.25   | 0.07 | U字状 |         |
| 2   | B-1・2<br>D-3・4 | N-70°-W | (24.40)   | (3.84) | (2.80) | (1.25) | 0.26 | U字状 | SD3 (旧) |
| 3   | C-3            | N-74°-W | [4.00]    | 0.40   | 0.08   | (1.25) | 0.91 | U字状 | SD2 (新) |

1～3は坏である。1・2は底部回転糸切である。1は見込み部分が平坦に整えられているが、沈線状に渦巻形のロクロ痕が平面的に残されている。3は底部周辺のヘラケズリ痕以外は不明瞭であるが、堅緻に焼成されている。4は剣形石製品とした。平面形状はナイフ状であるが、断面は菱形である。片方の側面は弧状になるように調整(研磨)されている。幅6mm前後のきわめて小さな鑿状工具によって削り出されており、工具痕が表面左側の一部に残存する。表裏とも端部と端部を結ぶように中央に稜を持つ。それぞれの面は剥離後の研磨によって平滑に調整されているが、擦痕の密度には面によって差がある。弧状の調整面と表面左側、裏面右側の擦痕は同程度の粗さである。表面右側および裏面左側の擦痕は緻密であり、工具痕も認められない。裏面左側には鋭利な刃物を滑らせたような傷跡が1箇所に見られる。また、弧状でない方の側面には、上部に両側からの穿孔の痕跡が認められる。石製の有孔円板などが破損したものを、後代に剣形石製品として加工しよう

と試みた未成品と推定される。

グリッドからは、これ以外に土師器坏片、陶磁器片などが合計260g出土している。



第16図 グリッド出土遺物

第6表 グリッド出土遺物観察表 (第16図)

| 番号 | 種別     | 器種    | 口径        | 器高     | 底径    | 胎土        | 残存 | 焼成 | 色調    | 備考                         | 図版  |
|----|--------|-------|-----------|--------|-------|-----------|----|----|-------|----------------------------|-----|
| 1  | ロクロ土師器 | 坏     | -         | [1.6]  | 6.2   | AH I      | 65 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切 底部内面に渦巻状ロクロ痕 摩耗 下総か | 8-1 |
| 2  | ロクロ土師器 | 坏     | -         | [1.8]  | 6.0   | AE I      | 30 | 普通 | 灰白    | 底部回転糸切                     | 8-2 |
| 3  | ロクロ土師器 | 坏     | -         | [2.2]  | (8.0) | AE I J    | 20 | 良好 | にぶい黄橙 | 底部糸切り後周縁ケズリ                | 8-3 |
| 4  | 石製品    | 剣型石製品 | 長さ [85.5] | 幅 21.5 | 厚さ 8  | 重さ 19.5 g |    |    | 灰黄褐   | 滑石                         | 8-4 |

## V 調査のまとめ

毛長沼外瓦A遺跡の調査では、古墳時代の溝跡2条と平安時代の溝跡1条が検出された。

古墳時代の遺構は第1号溝跡と第3号溝跡で、出土した遺物は中期初頭、和泉式初頭段階に位置づけられるものが中心であった。宮代町山崎山遺跡の年代観（福田2011）を援用すれば5世紀初頭と考えられる。

平安時代の遺構としては第2号溝跡で、遺物は9世紀後半を中心にその前後が散見される。以下では当遺跡の調査で得られた成果について、若干の検討を加えたい。

### 周辺の地形と遺構の性格について

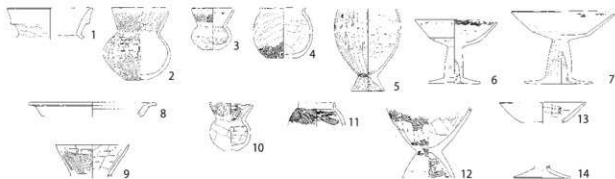
II-2章で述べたように、かつて大河であった毛長川の規模が縮小するのは約2000年前と推定されている。基本土層図（第6図）を見ると、第VI層はオリブ灰色の粗砂である。これを旧毛長川（大河）の河道の範囲とすれば、V層を掘りこむ第3号溝跡は出土遺物から5世紀初頭と推定できるため、V層はわずか数百年間でVI層上に約50cm堆積していることとなる。つまり、毛長川北岸の微高地群は、弥生後期から古墳前期に急速に形成されたことになる。草加市域の自然堤防では、本来はV層上にさらに別の土壌が堆積するとの指摘もあり（註1）、この要因については、今後の周辺の調査の進展が期待される。

毛長沼外瓦A遺跡はこの自然堤防の端に立地する（第2図）。III章以降、第2・3号溝跡は「溝跡」としてきたが、南側の立ち上がりは検出されていない。両遺構とも3m以上のきわめて幅広いことを考えれば、自然地形を利用した異なる性格の遺構の可能性がある。この場合、両溝に並行する第1号溝は排水等の目的をもった溝と推定され、集落の存在を至近に想定することができる。

### 第3号溝跡出土の土師器について

第3号溝跡および一部の第2号溝跡出土の土師器については、古墳時代中期初頭の年代観を与えた。これは、佐々木彰による伊興遺跡出土遺物の検討（佐々木1999）に基づいた。これを図示した第17図は、上段が伊興遺跡、下段が毛長沼外瓦A遺跡の出土遺物である。口縁部にハケ痕を残す肉厚の小型壺（第17図3）は10に対応し、縦位のケズリ痕跡をもつ細身の甕（第17図5）は12に類似する。また、高坏内面の横位ハケ調整痕跡（第17図6・7）は13に、壺の口縁部外面に粘土紐を貼り付けて有段化させる手法（第17図1）も8に類似が挙げられる。これらは中期初頭の根拠として佐々木が提示した特徴である。

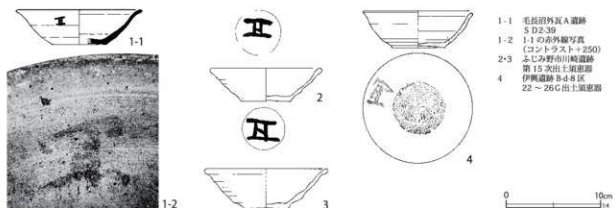
一方、第17図14の高坏は「下加南型高坏」（書上1996）に類似し、前期末に遡る可能性がある。加えて、坏が見られないことや高坏の裾部の屈曲



（1・4・6は伊興遺跡Ca-1区15G-1号遺構出土、2・3・5・7はB-d-5区16G-2号土器出土資料  
8～14は毛長沼外瓦A遺跡第3号溝跡出土）

0 20cm  
1:1

第17図 古墳時代中期初頭の遺物



第18図 墨書土器

が未発達なものが一定量見られることも、古相を示す。出土遺構が溝跡であるため、遺物にも時期差があると考えられる。

そのような意味では、第11図32は弥生時代以来の甕内面へのヘラミガキ手法（福田2013）を受け継ぐものとも考えられる。それは、古墳時代に至って、従来の大宮台地で営まれてきた集落から低地への進出をうかがわせるものでもあろう。

低地の開発をどこの人員が担ったかについて、東海地方からの移住説（高橋1985a）と、水田耕作地を求めての台地上からの進出説（柿沼1988など）が知られていることは既にⅡ-2章で触れた。事実関係を踏まえると、これらは本来対立するような見解ではないように思われる。甕の内外面へのミガキやハケ調整など伝統的な手法が採用され続ける。一方、毛長沼外瓦A遺跡からは出土しなかったものの、東海地方のS字甕によく似せた土器が周辺遺跡で多く出土することもまた事実である。この両者を考えあわせれば、大宮台地からの低地進出は東海地方由来の技術・文化によって先導され、その実際の担い手は大宮台地由来の人員であったと捉えられるだろう。

#### 墨書土器について

第2号溝跡からは墨書土器が出土している（第18図1）。口縁部を上に見た場合、「耳」あるいは「亘」と読める。「耳」に類似した文字の例は、ふじみ野市川崎遺跡の9世紀後半の住居跡から出

土している（第18図2・3）。6画目の縦棒が下部に僅かに突き出す点で酷似する。一方、赤外線写真（第18図1-2）からは、とめはねや運筆が「耳」とは異なるようにも思われ、どちらかというところ「亘」のようにも見える。土器への墨書の事例としては「耳」より「亘」・「亘」の方が多く、伊興遺跡では9世紀後半の須恵器にも類例が見られる（第18図4）。いずれにせよ、毛長川北岸にも文字を用いる人物が存在したことがわかる。

#### 平安期の交流について

従来、草加市域から出土する須恵器は、大半が南比企産のものでありとされてきた（草加市史編纂委員会1997・酒井1999）が、今回図示した須恵器28点の中では、南比企産は7点と25%にとどまった。東金子産は同数の7点であり、末野産が4点、下総産と湖西産が1点ずつで続く（8点は不明）。灰陶陶器は全て猿投産である。

南比企の減少と東金子の増大は、おそらくは9世紀中葉以降の東金子窯の生産規模の拡大に対応したもの（酒井1999）であろう。また、伊興遺跡でも少数ながら下総産の須恵器が入っていることは従来から指摘されてきた（同上）が、毛長沼外瓦A遺跡では須恵器に加えて、内黒土器の鉢（第13図36）も八千代市北海道遺跡の9世紀後半に類例が見られる（藤岡1987）。よって、他の内黒壇も下総系統の可能性が考えられる。

従来、毛長川北岸は、復元図などでも低地帯と

して人間があまり居なかったかのように描かれてきた(村石眞澄・2004など)が、今回の調査成果により、周辺地域と活発な交流があったことが明らかになったと言える。

## 註

- 1 高橋一夫氏から現場で教示。

## 主要参考文献

- 足立区伊興遺跡調査会 1996『舎人遺跡』足立区伊興遺跡調査会  
 足立区伊興遺跡調査会 1997『伊興遺跡』足立区伊興遺跡調査会  
 足立区伊興遺跡調査会 1998『足立区北部の遺跡群』足立区伊興遺跡調査会  
 足立区伊興遺跡調査会 1999『伊興遺跡Ⅱ』足立区伊興遺跡調査会  
 足立区教育委員会 2009『舎人遺跡Ⅳ』足立区教育委員会・足立区遺跡調査会  
 足立区教育委員会・国際文化財株式会社 2016『若宮八幡神社遺跡Ⅲ』足立区教育委員会・国際文化財株式会社  
 遠藤邦彦・小杉正人・鈴木茂・菱田量 1987「草加市周辺の縄文海進期の植種層序と古環境」  
 『日本大学文学部自然科学研究所研究紀要』第22号 p47-56  
 遠藤邦彦・小杉正人・高野司 1988「草加市の地質と古環境」『草加市史 自然・考古編』草加市p21-69  
 書上元博 1996「古墳時代前期の土器群について」『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第175集  
 柿沼幹夫 1988「第4章 古墳を築いた人びと」『川口市史 通史編』p77-101  
 (株)ジオダイナミック 2015『花畑遺跡Ⅲ』(株)ジオダイナミック  
 上福岡市史編纂委員会 1997『上福岡市史 資料編 第2巻』上福岡市  
 久保純子 1994「東京低地の水域・地形の変遷と人間活動」『防災と環境保全のための応用地理学』古今書院p141-158  
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984『中原後・石御堂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第39集  
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985『蛸蛤遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第53集  
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005『東地総田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第314集  
 酒井清治 1999「毛長川流域における5～10世紀の須恵器の様相」  
 『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会 p169-186  
 佐々木彰 1999「毛長川流域の古墳時代土器の様相—前期～後期初頭の一括資料を中心として—」  
 『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会 p67-108  
 草加市教育委員会 2017『仲町沼田遺跡第3地点発掘調査報告書』草加市教育委員会  
 草加市史編纂委員会 1997『草加市史 通史編 上巻』草加市  
 草加・八潮遺跡確認調査団 1981『中川低地遺跡確認調査報告書』草加市史編纂室・八潮市史編纂室  
 大成エンジニアリング株式会社 2015『花畑遺跡Ⅱ』川口土木建築工業株式会社  
 高橋一夫 1982「草加の遺跡(1)——毛長川流域を中心として——」『草加市史研究』第2号 p1-34  
 高橋一夫 1985a「関東地方における非在系土器の意義」『草加市史研究』第4号 p1-56  
 高橋一夫 1985b『草加市の文化財(10) 西地総田遺跡発掘調査報告』草加市教育委員会  
 高橋一夫 1987『草加市の文化財(12) 東地総田遺跡発掘調査報告』草加市教育委員会  
 高橋操 1982「草加の地名について(2)」『草加市史研究』第2号 p35-57  
 福田聖 2010「山崎山遺跡出土の古墳時代の土器群について」『山崎遺跡・山崎山遺跡』  
 宮代町文化財調査報告書 第15集 p242-244  
 福田聖 2013「古式土器における焼磨き手法」岡内三眞 編『技術と交流の考古学』同成社 p184-190  
 藤岡孝司 1987「八千代市北海道遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 p161-180  
 村石眞澄・橋本真紀夫・辻本裕也 1999『伊興遺跡の立地環境と古環境について』  
 『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会 p295-306  
 村石眞澄 2004「東京低地北部毛長川周辺の地形環境と遺跡立地」国立歴史民俗博物館研究報告 第118集p93-117

## 写真図版



1 調査区全景 (1) (西から)



2 調査区全景 (2) (西から)

図版 2



1 第1号溝跡遺物出土状況(1)(西から)



5 第2号溝跡(東)(東から)



2 第1号溝跡遺物出土状況(2)



6 第2(東)・3号溝跡断面(東から)



3 第1号溝跡遺物出土状況(3)(東から)



7 第2号溝跡(西)断面(西から)



4 第1号溝跡(東から)



8 第2号溝跡(西)遺物出土状況(1)



1 第2号溝跡(西)遺物出土状況(2)



5 第3号溝跡遺物出土状況(3)(東から)



2 第2号溝跡(西)



6 第3号溝跡遺物出土状況(4)(北から)



3 第3号溝跡遺物出土状況(1)(西から)



7 第2(東)・第3号溝跡



4 第3号溝跡遺物出土状況(2)(北から)



8 第3号溝跡

图版 4



1 第1号沟迹 (第7图1)



7 第3号沟迹 (第10图10)



13 第3号沟迹 (第11图28)



2 第3号沟迹 (第10图1)



8 第3号沟迹 (第10图11)



14 第3号沟迹 (第11图29)



3 第3号沟迹 (第10图2)



9 第3号沟迹 (第10图13)



15 第3号沟迹 (第11图32)



4 第3号沟迹 (第10图3)



10 第3号沟迹 (第10图18)



16 第3号沟迹 (第11图33)



5 第3号沟迹 (第10图5)



11 第3号沟迹 (第10图19)



17 第2号沟迹 (第13图1)



6 第3号沟迹 (第10图7)



12 第3号沟迹 (第10图20)



18 第2号沟迹 (第13图2)



1 第2号沟跡 (第13图3)



8 第2号沟跡 (第13图10)



15 第2号沟跡 (第13图20)



2 第2号沟跡 (第13图4)



9 第2号沟跡 (第13图11)



16 第2号沟跡 (第13图21)



3 第2号沟跡 (第13图5)



10 第2号沟跡 (第13图13)



17 第2号沟跡 (第13图24)



4 第2号沟跡 (第13图6)



11 第2号沟跡 (第13图15)



18 第2号沟跡 (第13图22)



5 第2号沟跡 (第13图7)



12 第2号沟跡 (第13图16)



19 第2号沟跡 (第13图23)



6 第2号沟跡 (第13图8)



13 第2号沟跡 (第13图17)



20 第2号沟跡 (第13图25)



7 第2号沟跡 (第13图9)



14 第2号沟跡 (第13图19)



21 第2号沟跡 (第13图26)

图版 6



1 第2号沟迹 (第13图27)



2 第2号沟迹 (第13图28)



3 第2号沟迹 (第13图29)



4 第2号沟迹 (第13图30)



5 第2号沟迹 (第13图31)



6 第2号沟迹 (第13图32)



7 第2号沟迹 (第13图33)



8 第2号沟迹 (第13图34)



9 第2号沟迹 (第13图35)



10 第2号沟迹 (第13图36)



11 第2号沟迹 (第14图37)



12 第2号沟迹 (第14图38)



13 第2号沟迹 (第14图39)



14 第2号沟迹 (第14图40)



15 第2号沟迹 (第14图41)



16 第2号沟迹 (第14图42)



17 第2号沟迹 (第14图44)



18 第2号沟迹 (第14图45)



19 第2号沟迹 (第14图46)



1 第2号沟迹 (第14图47)



7 第2号沟迹 (第15图72)



13 第2号沟迹 (第15图79)



2 第2号沟迹 (第14图48)



8 第2号沟迹 (第15图73)



14 第2号沟迹 (第15图80)



3 第2号沟迹 (第14图49)



9 第2号沟迹 (第15图74)



15 第2号沟迹 (第15图81)



4 第2号沟迹 (第14图53)



10 第2号沟迹 (第15图75)



16 第2号沟迹 (第15图82)



5 第2号沟迹 (第14图54)



11 第2号沟迹 (第15图76)



17 第2号沟迹 (第15图83)



6 第2号沟迹 (第15图65)



12 第2号沟迹 (第15图78)



18 第2号沟迹 (第15图84)

図版 8



1 グリッド (第16図1)



2 グリッド (第16図2)



3 グリッド (第16図3)



4 グリッド (第16図4)



5 第2号溝跡 (第15図)



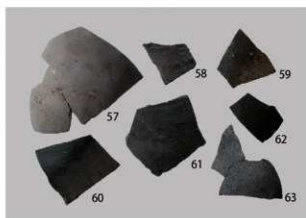
6 第3号溝跡 (第10図)



7 第3号溝跡 (第11図)



8 第2号溝跡 (第13・14図)



9 第2号溝跡 (第14・15図)



10 第2号溝跡 (第15図)

# 報告書抄録

|                                                                                                                                                                                                  |                                             |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------|--------|-------|--------------------|-------------|----------------------------------------------------------|-------------|------|
| ふりがな                                                                                                                                                                                             | けながぬまそとかわらAいせき                              |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| 書名                                                                                                                                                                                               | 毛長沼外瓦A遺跡                                    |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| 副書名                                                                                                                                                                                              | 株式会社東栄住宅分譲住宅事業予定地に係る埋蔵文化財発掘調査報告             |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| シリーズ名                                                                                                                                                                                            | 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書                            |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| シリーズ番号                                                                                                                                                                                           | 第447集                                       |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| 編著者名                                                                                                                                                                                             | 魚水 環                                        |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| 編集機関                                                                                                                                                                                             | 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団                        |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| 所在地                                                                                                                                                                                              | 〒369-0108 埼玉県熊谷市泊木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955 |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| 発行年月日                                                                                                                                                                                            | 西暦2018(平成30)年9月21日                          |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| 所収遺跡                                                                                                                                                                                             | ふりがな<br>所在地                                 | コード    |       | 北緯<br>° ' "        | 東経<br>° ' " | 調査期間                                                     | 調査面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|                                                                                                                                                                                                  |                                             | 市町村    | 遺跡番号  |                    |             |                                                          |             |      |
| 毛長沼外瓦A遺跡                                                                                                                                                                                         | 埼玉県草加市新里町149番地1号他                           | 112216 | 09    | 35°48'32"          | 139°46'56"  | 20180401<br>～<br>20180531                                | 224.08      | 分譲住宅 |
| 所収遺跡                                                                                                                                                                                             | 種別                                          | 主な時代   | 主な遺構  | 主な遺物               |             | 特記事項                                                     |             |      |
| 毛長沼外瓦A遺跡                                                                                                                                                                                         | 集落跡                                         | 古墳時代   | 溝跡 2条 | 土師器 土製品            |             | 古墳時代の溝跡を掘り直した平安時代の溝跡が検出された。東海地方や千葉県などで生産された須恵器や土師器が出土した。 |             |      |
|                                                                                                                                                                                                  |                                             | 平安時代   | 溝跡 1条 | 土師器 土製品<br>須恵器 石製品 |             |                                                          |             |      |
| 要約                                                                                                                                                                                               |                                             |        |       |                    |             |                                                          |             |      |
| <p>毛長沼外瓦A遺跡は中川低地の南部に位置し、入間川の旧河道である毛長川の左岸自然堤防上に立地する。今回の調査では、古墳時代と平安時代の遺構・遺物が検出された。</p> <p>古墳時代は平行する2条の溝跡が検出され、中期を中心とした遺物が出土した。</p> <p>平安時代は埋まりきっていなかった古墳時代の溝を掘り直した溝跡が検出され、9世紀後半を中心とした遺物が出土した。</p> |                                             |        |       |                    |             |                                                          |             |      |

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第447集

## 毛長沼外瓦A遺跡

株式会社東栄住宅分譲住宅事業予定地に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告

平成30年9月14日 印刷

平成30年9月21日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社